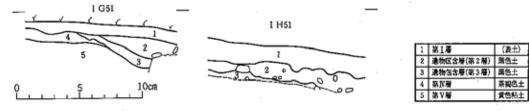
2. 北側遺物包含層

調査区の北端西側に位置し、北東向きの緩斜面に形成されている。IG・IH51~55 区の10 グリッド約90 ㎡に広がっている。層は2枚(第2層、第3層)に分かれる。包含層下より溝が検出されており、この構内上部からその周辺に分布する状況がみられる。



第205図 北側遺物包含層断面図

中期の土器

中期の土器には深鉢がある。

《口縁部資料》(第206図1)

口縁部は外反し、胴部で強く脹む。口縁部は波状口縁となる。胴部の文様は無文帯と充塡縄 文帯が沈線で区画されている。

《胴部資料》(第 206 図 2)

胴部の文様は幅の広い無文帯と充塡縄文帯が降線で区画されている。

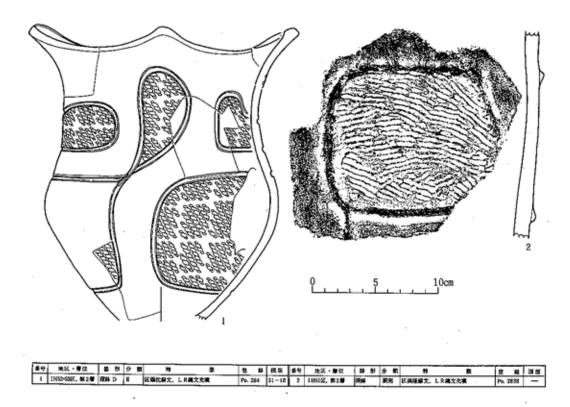
後期前葉の土器

第3層出土土器

《口縁部資料》

深鉢(第207図、第208図1~6)

- a、第207図1:胴部中位に稜がつき、それ以上が外反気味に立ち上がる器形である。胴部 上半に方形区画文が施文されている。
- b、第207図2: 頚部が緩やかにくびれる器形である。口縁部は外反して山形突起がつく。 胴部は張り出している。胴部に渦文からボタン状隆線を介して沈線が下垂する上下連結の文 様がみられる。
- c、第207 図3: 頚部が「く」字状にくびれる器形である。口縁部は外傾し、胴上部が内弯し、下部がすぼまる。端部に段を形成する。窓の開いた丸い突起がつき、突起から頚部に連鎖状隆線が下垂する。胴部に楕円文・渦入弧状文が施文されている。文様は3単位と推定される。



第206図 北側遺物包含層出土土器 (中期)

d、第207 図4~6、第208 図1・2:口縁部・胴部がわずかに脹みをもって立ち上がる器形である。胴部に「U」字文、蕨手文などが施文され、第208 図1 は文様、突起とも3 単位である。

《胴部資料》

深鉢(第208図3~6)

- a、第208 図3: 胴上部が張る器形と思われる。口縁下部には弧状隆線がみられ、胴上部に連続刺突文が施文されている。
 - b、第208図4:頚部が「く」字状にくびれる器形と思われる。多条沈線文様が認められる。
- c、第208図5・6:口縁部までわずかに脹みをもって立ち上がる器形と思われる。細長い単位の文様がみられる。

壺(第208図7)

小形の壺である。平行隆線が下垂していることからみて胴部中位に(あるいは頚部にも)把 手のつく器形と思われる。文様単位は不明である。

第2層出土土器

《口縁部資料》

深鉢(第209図~第215図10)

- a、第209図1~5: 頚部が「く」字状にくびれる器形である。1は口縁部が外傾して端部は段を成し、大小一対の突起がつく。突起下から頚部に隆沈線が下垂する。胴部に渦、楕円のついた三角文が施文されている。2 は口縁部が外傾して端部は丸くおさまる。胴部に文様がみられる。3~5は口縁部破片である。3・4 には大小一対の、5 には山形小突起がつく。
- b、第209図6:口縁部が内反する器形である。頚部に稜がついて胴部は直線的に外傾する。 口縁部は無文、胴部に蕨手文がみられる。
- c、第 209 図 7~9:口縁部・胴部が直線的に外傾する器形である。7・8 は口縁端部に段が つく。文様単位は不明である。9 は口縁端部が削がれたように三角を成し、盲孔のついた突起 がみられる。胴部に蕨手文、破線文が施文されている。
 - d、第210図1:胴上部から口縁部にかけて内弯する器形である。多条沈線文様がみられる。
- e、第 210 図 2・3、第 211 図~第 215 図 10:口縁部・胴部がわずかな脹みをもって立ち上がる器形である。低い山形突起のつくものが多い。

第 210 図 2 は口縁部が外反気味である。胴部に渦状の文様からボタン状隆線を介してジグザグ文が下垂する上下連結文様がみられる。

第 210 図 3 は口縁部が外反気味になり、ねじれて「8」字状を呈する突起が 4 個とその中間 に山形突起とがつく。口縁部は無文で胴部上半に方形区画文か施されている。

第 211 図、第 212 図、第 213 図 1~3・5~14 は胴部に縦位平行線の上部が肥大した楕円文、「U」字文、蕨手文などと、単に下垂するジグザグ文、破線文などがみられ、また口縁部突起下に下垂沈線、盲孔のつくものもある。単位数は8単位のものがあり、第 211 図 4、第 212 図 1は異なった単位が交互に繰り返される。第 212 図 1 は口縁部の突起とその下の下垂沈線も8 個みられ、また第 212 図 6 は同じ単位が並列する。

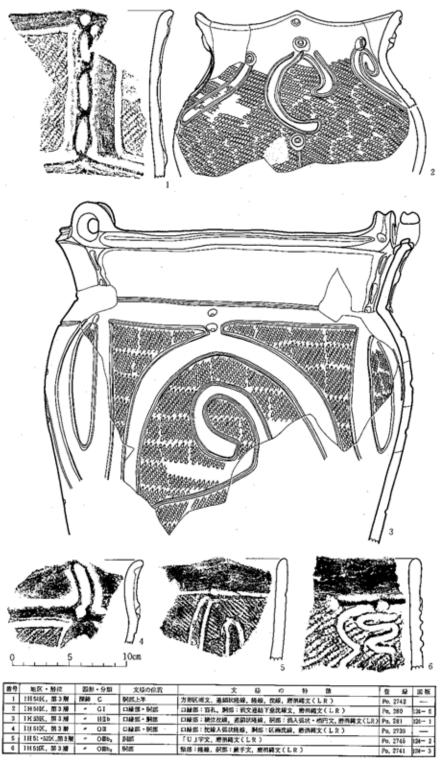
第 213 図 4、第 214 図 1・2・18 は幅広い単位と思われ、第 213 図 15・17・19 は胴部文様が明らかでない。

第214 図3・5・6 は口縁部が内弯気味で、多条沈線文様がみられる。第214 図4 は区画沈線と刺突文による文様が描かれているが単位形は不明である。

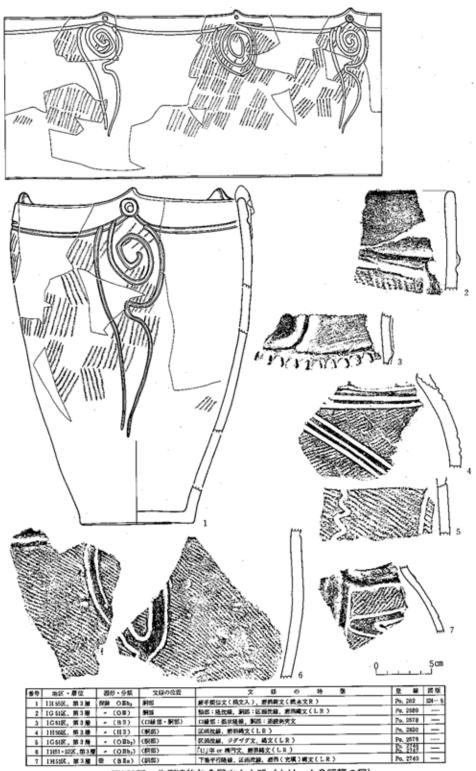
第215 図1は口縁部突起下にのみ文様がみられる。沈線の入った下垂隆線である。第215 図2~10は口縁部、胴部が無文あるいは地文で、2・3 は沈線、隆線で頚部が画されている。

壺(第215図11・12)

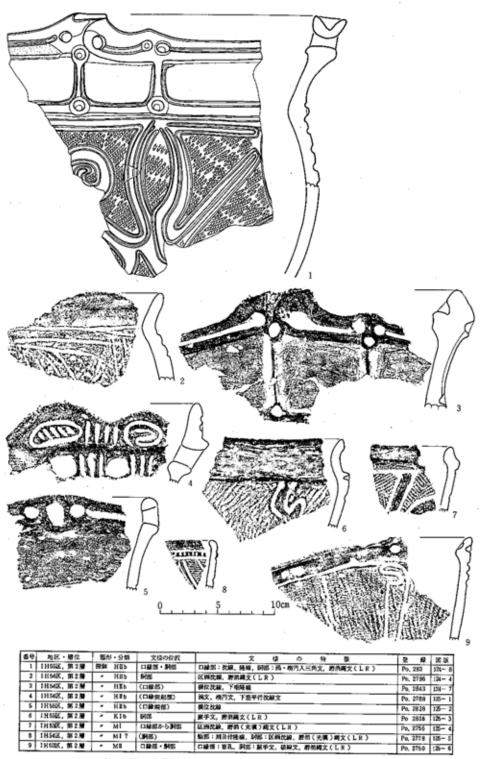
小形の壺と思われる。胴部に文様が認められる。



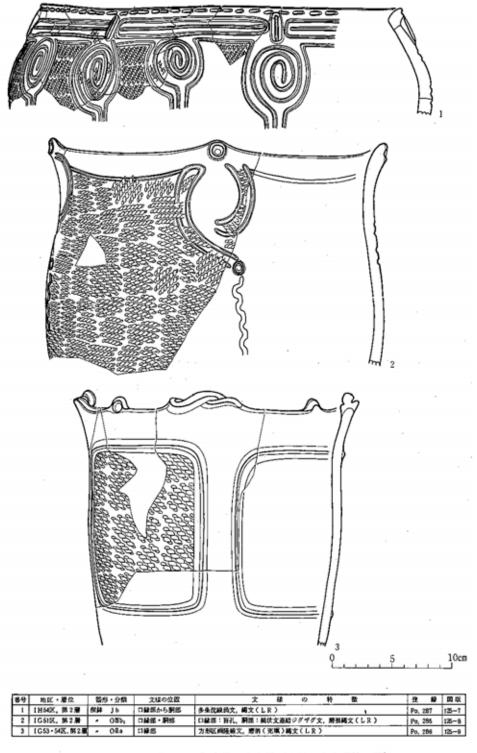
第207図 北側遺物包含層出土土器 (IH・IG区第3層)



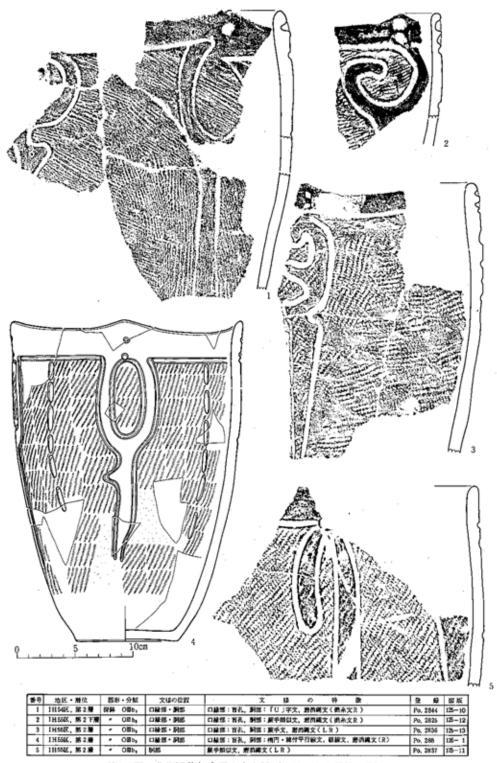
第208回 北側遺物包含層出土土器 (IH·IG区第3層)



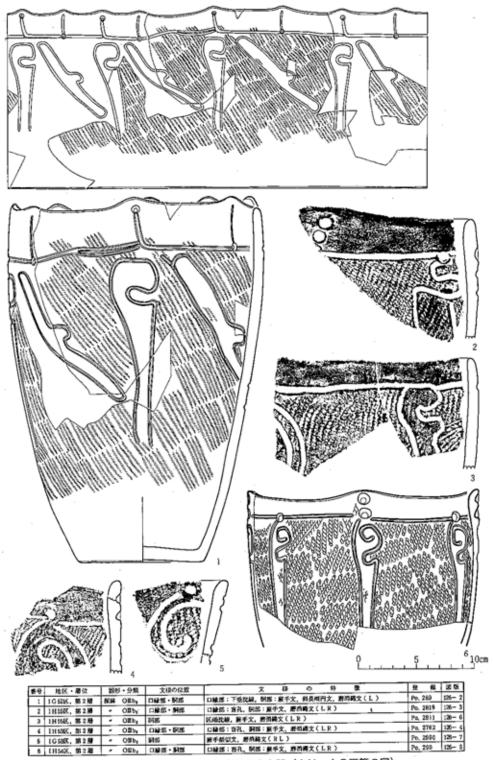
第209図 北側遺物包含層出土土器 (IH・IG区第2層)



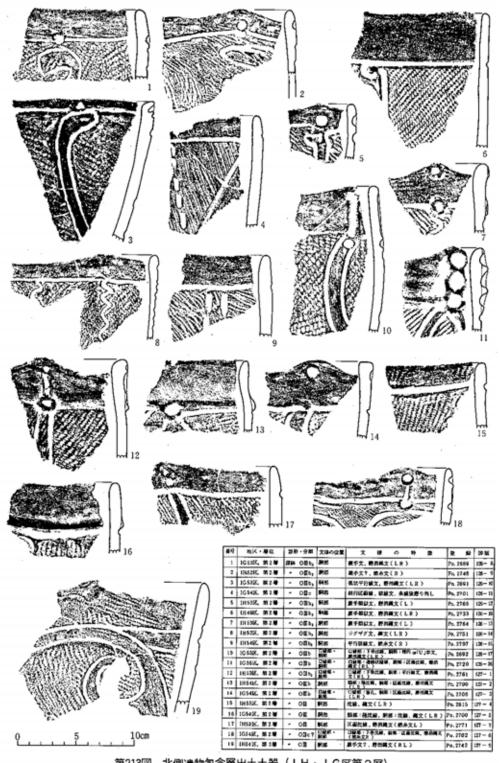
第210図 北側遺物包含層出土土器 (IH・IG区第2層)



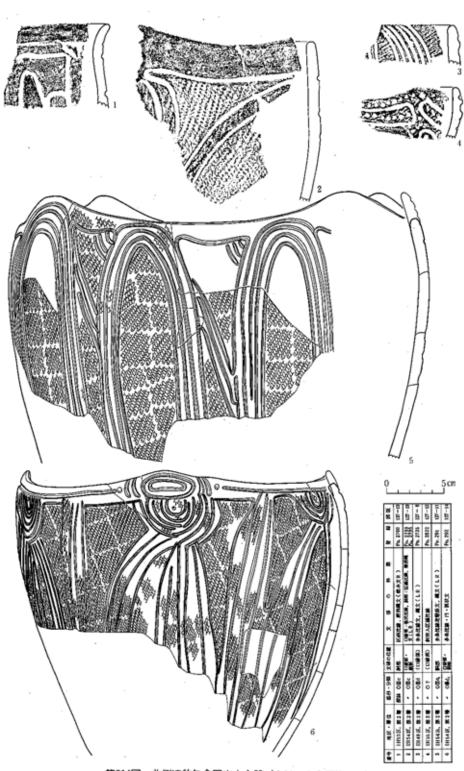
第211図 北側遺物包含層出土土器 (IH·IG区第2層)



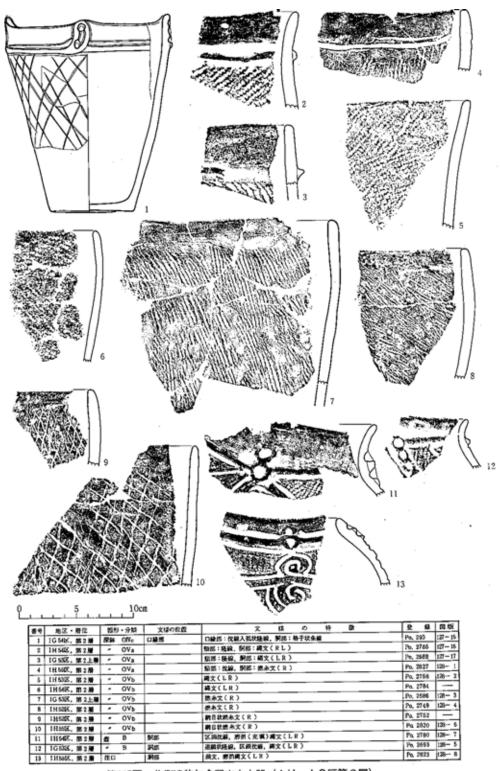
第212図 北側遺物包含層出土土器 (1 H· 1 G区第2層)



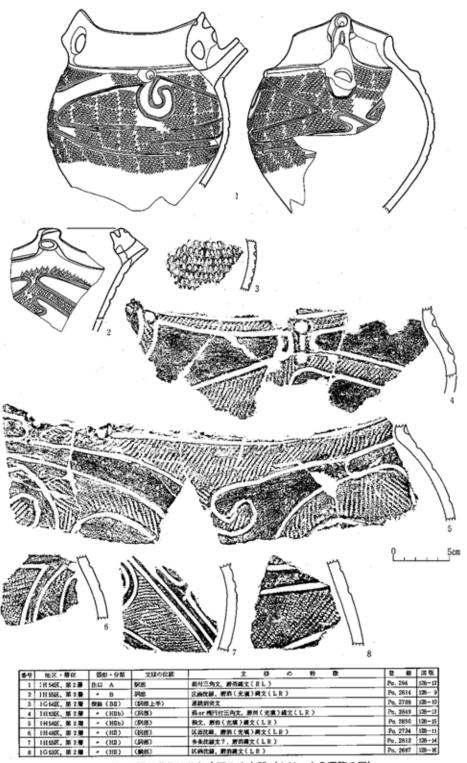
第213図 北側遺物包含層出土土器(IH・IG区第2層)



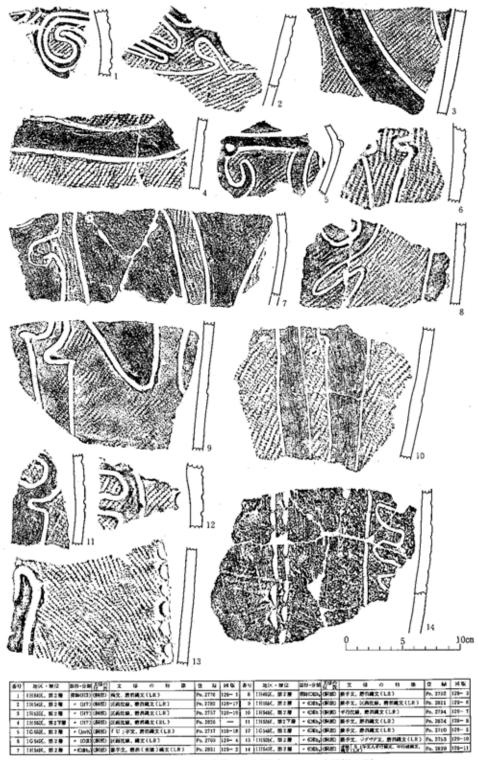
第214図 北側遺物包含層出土土器 (IH・IG区第2層)



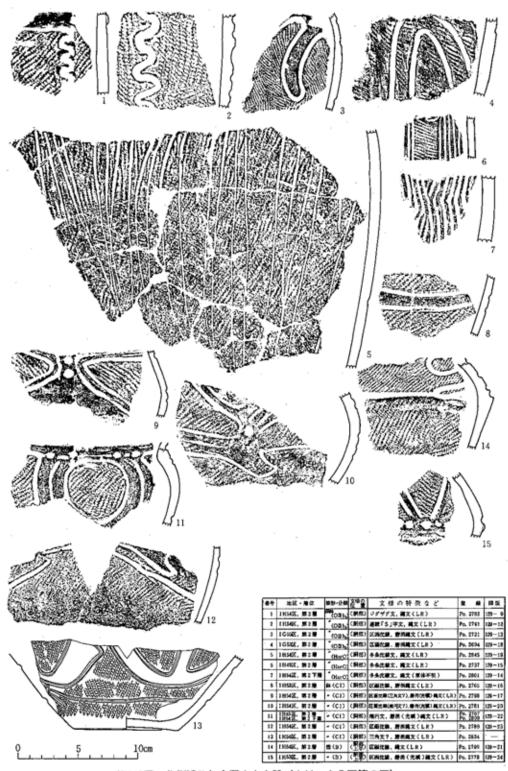
第215図 北側遺物包含層出土土器 (IH・IG区第2層)



第216回 北側遺物包含層出土土器 (! H・IG区第2層)



第217図 北側遺物包含層出土土器 (IH・IG区第2層)



第218図 北側遺物包含層出土土器 (IH・IG区第2層)

注口土器(第215図13、第216図1・2)

13 は壺形の注口土器と思われる。胴部に渦文がみられる。1 も壺形で、口縁部は内反し、橋 状把手と突起が一体となって2個つき、一方の把手下・胴部上端に注口がつく。胴部は球状を 呈する。口縁部は無文、胴部に渦付三角文が施文されている。

2 は鉢形の注口土器である。口縁部は内反し、突起と一体になった上向きの短い注口がつく。 胴部に文様がみられる。

《胴部資料》

深鉢(第216図3~8、第217図、第218図1~7)

- a、第216 図3:胴上部が張る器形と思われる。連続刺突文がみられる。
- b、第 216 図 4~8、第 217 図 1: 頚部が「く」字状にくびれる器形と思われる。渦文などが認められる。また第 217 図 2~4 も同様の器形かも知れない。
- c、第217図5:口縁下部が内傾し、頚部に稜がついて胴部は直線的に外傾する。胴部に「U」字状文がみられる。
- d、第217図6~14、第218図1~4:口縁部までわずかに脹みをもって立ち上がる器形と思われる。蕨手文、破線文、ジグザグ文などが描かれている。

第218図5~7は器形が判明しない。

鉢(第218図8~13)

いずれも頚部が「く」字状を呈する器形と思われる。楕円文などが認められる。

萱(第 218 図 14・15)

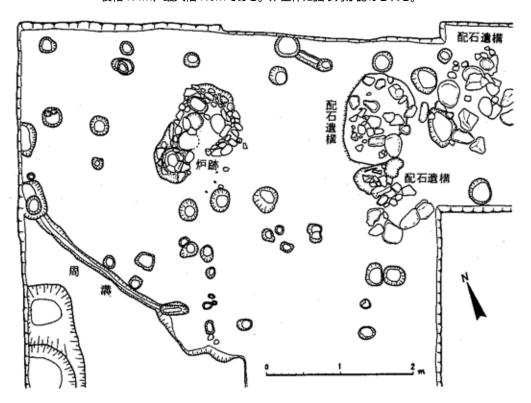
小形の壺である。胴部中位に稜がつき、それより上に文様が施文されている。

3. 竪穴住居跡

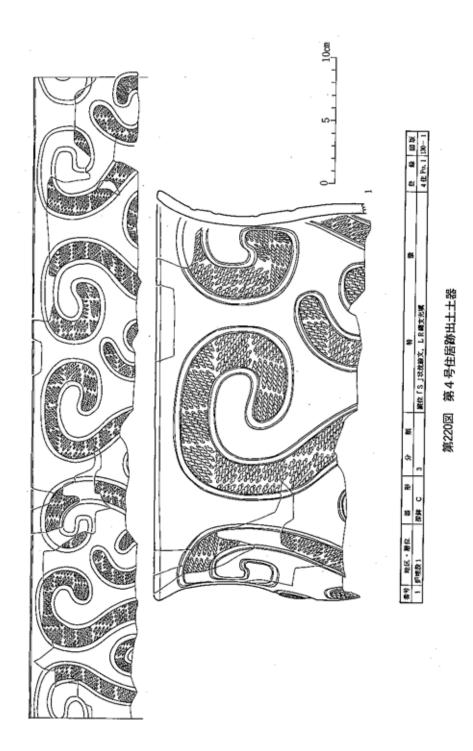
縄文時代の竪穴住居跡は4軒発見された。第4、8号住居跡は平坦部北半に位置し、第4号住居跡がHT49区、第8号住居跡がHS55区である。第6、7号住居跡は平坦部南半に位置し、第6号住居跡がGQ・GR53・54区、第7号住居跡がGQ・GR50・51区にあたる。これらの遺構を確認した面は第6号住居跡が基本層位第 層上面、他は基本層位第 層(地山)面である。第4号住居跡

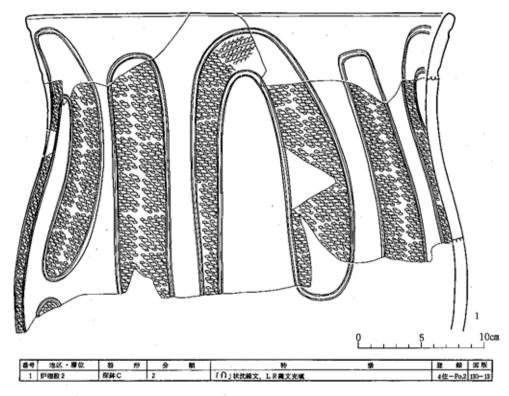
段丘上平坦面の北半で検出した住居跡は、中央に大木 10 式土器 2 個を埋込み円礫で囲んだ 炉跡を^{注)}有する直径 5m前後のもので、周溝の 1 部も検出されているが、壁の存在が不明確で あり、且つ、東半は配石遺構によって破壊されている。なお、炉跡内の焼土は微量であった。 (岡田茂弘、林謙作)

注) 炉に使用された石は一部失なわれているが土器埋設石囲部・敷石石組部からなる土器埋設石組複式炉である。石囲部には2個の深鉢形土器が縦に並んで埋設されている。大きさは長軸1.4m、最大幅1.0mである。炉全体に掘り方が認められる。



第219図 第4号住居跡





第221図 第4号住居跡出土土器

出土遺物

炉跡(炉埋設土器)から胴上半部が残在する深鉢が2点出土している。

深鉢

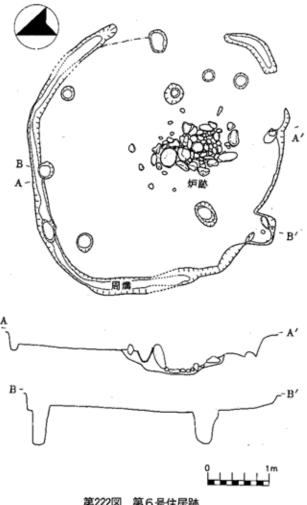
口縁部資料(第220図・第221図)

第220 図・第221 図は口縁部が外反し、胴部が緩やかに脹む。第220 図は縦位「S」状・「C」 状の文様が幅の広い沈線で胴部全体に描かれ、それらの文様の内部に縄文が充塡されている。 文様構成は大きな縦長の「S」状文が向い合い、その間に挟まれた小形の「C」状文とが繰り 返されている。第221 図は「」、状文と上部で反転する「」、状の文様が幅の広い沈線で胴部 全体に描かれ繰り返され、それらの文様の内部には縄文が充塡されている。

第6号住居跡

直径約4.1~4.3mのほぼ円形のプランを有する竪穴住居跡で、炉の中軸線は南北線上を通る。 黒色上層を掘りこんでつくられているため、壁の判別は不明確であるが、周溝が存在するため、 ほぼ正しく把握できる。床面はかたくたたきかためられ、薄い黄色の粘土による張り床の形跡 が認められる。この黄色粘土は住居跡中央部ではさほど顕著でないが、周縁部には比較的厚く

残っているため、その存否によって 周溝の検出は明瞭になされた。周溝 は幅 20 cm内外、床面からの深さ約 10 cmのもので住居跡北側半周、東南 隅に見い出された。南側では数個の 河原石によって遮られ、又東側では 黄色粘土が存在しないため、検出が 不可能であった。周溝の埋土は、床 面に比べてやや軟かい黒色土で、底 に黄色粘土の落ちこんでいる部分も ある。柱穴とみられるピットは中軸 線をはさんで東西に約 2m間隔で 各々二個づつみられるが北東のピッ トがいくぶん東にずれているため正 しい方形とはならない。各ピットの 底面における直径と、床面からの深 さは、北西ピット 20 cm・50 cm、南 西ピット 18 cm・50 cm、北東ピット 14 cm・36 cm、南東ピット 12 cm・39 cmである。他に北及び西端に深さ約 27 cm・30 cm、南東ピットの南に約



第6号住居跡

20 ㎝のピットが検出されている。特に北端ピットはその配置上、前記の 4 ピットと共に柱穴の 一部をなす可能性も考えられる。炉跡は住居跡中央部やや南側に構築されている。床面から 40 cm程掘りくぼめたいわゆる複式炉で、南側に石組部分、北側に石で囲まれた埋甕部分を^{注)}もちそ の境には長さ40 cm程のだ円形河原石がたてに埋めこまれている。石組部分は長径1m短径80 cm の楕円形で周縁を径 20 cmほどの河原石で囲み、壁、底面にも小さな河原石をはめこんだ念入り なもので底石上面での深さ約30㎝である。又使用された石は焼けて赤変している。埋甕は径30 cm、器高は口縁部が破損しているため不明であるが、現高 24 cmである。この炉跡の長さは 1.4 mである。焼土は埋甕内部および周囲、石組部分北部に認められ厚さは 4~6 cmである。又南西 部に周溝がとぎれ幅約40cmの黄色粘土が周溝から外側に約25cm、床面から7cm程の傾斜をもっ て張り出す部分があり出入口と考えられる。この住居跡の時期については、住居跡埋土及び床面

注) 南側に石組部分、北側に石で囲まれた埋甕部分とは敷石石組部・閉鎖石組部、土器埋設石囲部 のことである。この炉は後述の3部からなる土器埋設石組複式炉である。なお、石囲部に埋設 されていた土器は整理の際確認できなかった。

出土遺物

(後期の土器)

いずれも深鉢である。1~8 は口縁部資料で、1・2 は口縁部が外傾し、1 には頂部が凹む突起がつき、2 は多条沈線文様がみられる。3 は口縁部から胴上部まで直線的に外傾する。低い山形の突起がつき、突起下の口縁部に円窓とその両脇に盲孔がみられる。胴部には「S」字連鎖文が施文されている。4~8 は口縁部から胴上部がほぼ垂直に立ち上がる。4~7 は胴部に沈線文様がみられ、4~7 は低い山形突起がついて、突起頂部から頚部へ刺突や沈線が加えられた弧状隆線や沈線が下る。8 は低い山形突起頂部から頚部へ隆線が下垂し、胴部に地文(縄文)がみられる。

9・10 は胴部資料である。磨消縄文技法を用いた沈線文様が施されている。

(中期の土器)

〔堆積土〕

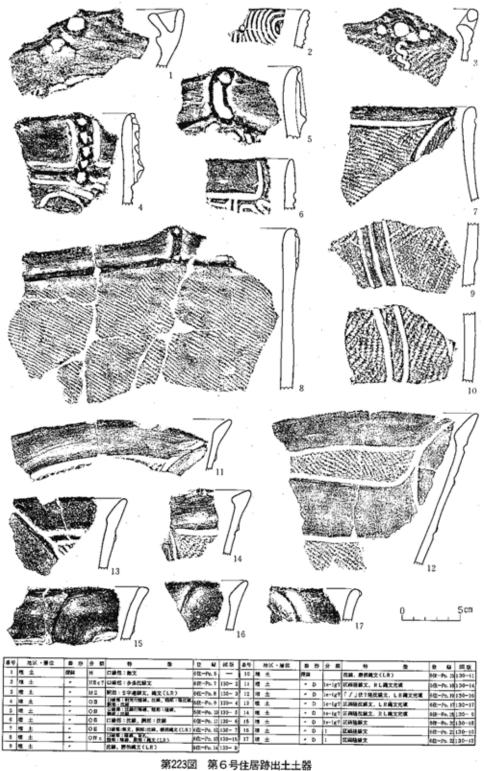
深鉢

口縁部資料 (第 223 図 11~17、第 224 図 1~17)

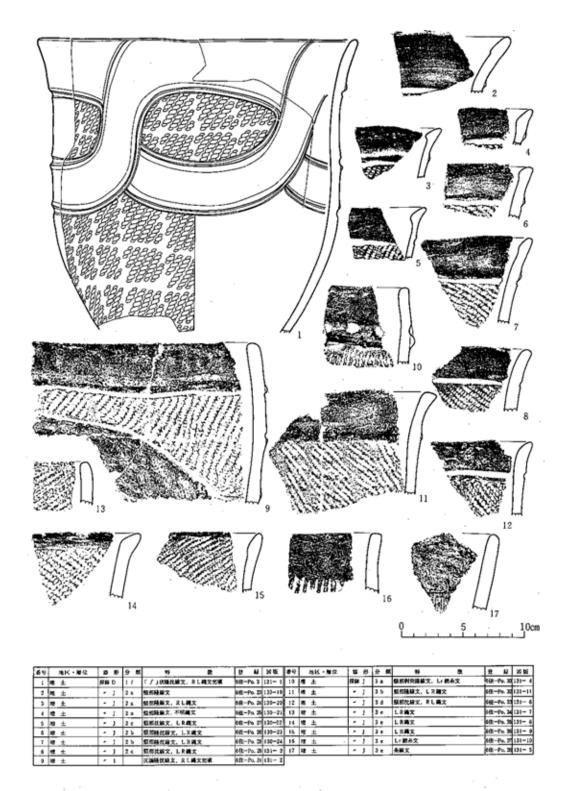
a:口縁部が外反するもの(第223図11~17、第224図1~8)。

第223 図 11~14・16、第224 図 2~7 は口縁部内面に稜が巡り、肥厚する。第223 図 12 は「コ」状の無文帯が隆沈線によって胴上部に描かれているものと推定され、その文様の外側に縄文が充塡されている。第234 図 1 は「」」状の無文帯が隆沈線によって胴上部に描かれ、その外側に縄文が充塡されている。第223 図 11・15~17 は隆線、第223 図 12~14 は隆沈線によって文様が描かれ、幅の広い無文部分と縄文部分とを区画している。第223 図 11・13・14 は区画内に縄文が充塡されている。第224 図 2~4 は隆線、第224 図 6・7 は隆沈線、第224 図 5・8 は沈線が頚部に巡り、口縁部無文と胴部地文とを区画している。

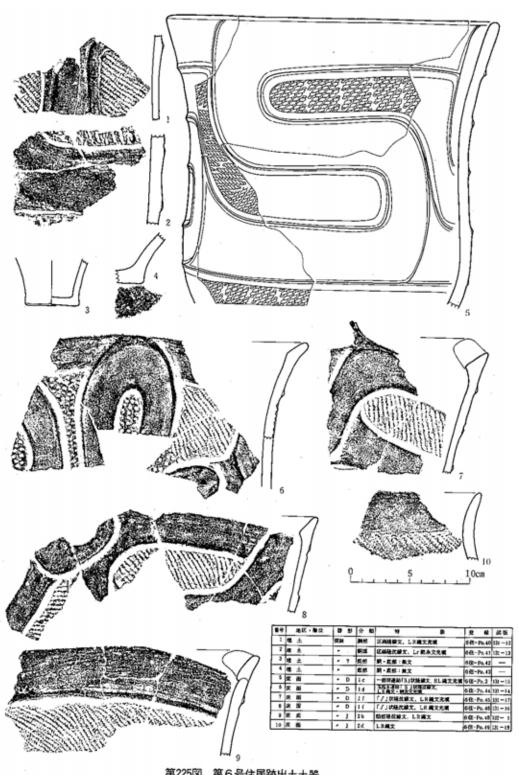
- b:口縁部が直立するもの(第224図9~17)。
- 9 は胴部に隆沈線によって文様が描かれ、幅の広い無文部分と縄文部分とを区画している。 10 は頚部に巡る隆線に沿って刺突文が加えられている。胴部には地文が施されている。11 は隆 線、12 は沈線が頚部に巡り、口縁部無文と胴部地文とを区画している。13~17 は胴部に地文が



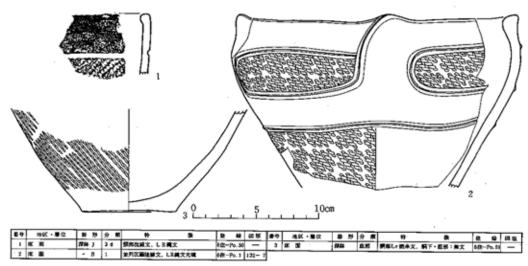
第223図 第6号住居跡出土土器



第224図 第6号住居跡出土土器



第225図 第6号住居跡出土土器



第226図 第6号住居跡出土土器

施されている。

胴部資料(第225図1・2)。

1 は隆線、2 は隆流線によって文様が描かれ、幅の広い無文部分と縄文部分とを区画している。

底部資料(第225図3・4)。

3・4 は胴下部・底部とも無文である。

〔床面〕

深鉢

口緣部資料 (第 225 図 5~10·第 226 図 1·2)

- a:口縁部が外反するもの(第225図5~10)。
- 6~9 は口縁部内面に稜が巡り、肥厚する。7・8 は口縁端部が小波状突起となる。9 は口縁部内面が一部つば状になる。5 は胴上部に文様が描かれ、胴下部は地文のみとなる。胴上部の文様は隆線による「S」状文(一部非連結)が描かれ、「S」状文の外側には縄文が充塡されている。6 は隆沈線による各部分で連結し、複雑に入り組んで玉抱く連結「S」状が描かれ、その内部に刺突文・縄文が充塡されている。7・8 は「〉」状の文様が隆沈線によって描かれ、文様の外側に縄文が充塡されている。9 は頚部に隆沈線が巡り、口縁部無文と胴部地文とを区画している。10 は胴部に地文が施文されている。
 - b:口縁部が直立するもの(第226図1)。
 - 1は頚部に沈線が巡り、口縁部無文と胴部地文とを区画している。

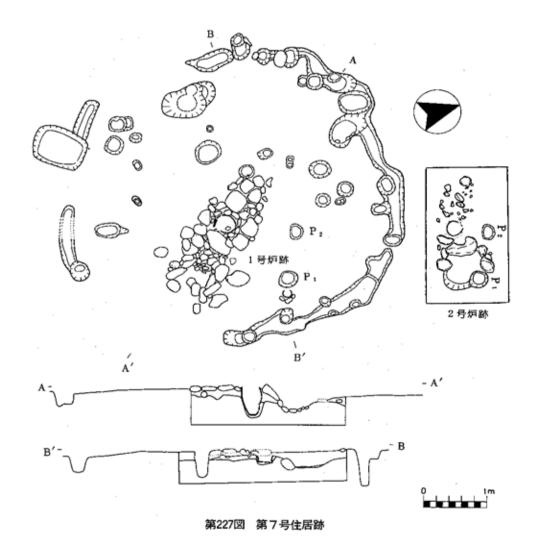
- c:口縁部が内弯し、胴部の屈曲が緩やかなもの(第226図2)。
- 2 は胴中央部に隆線がひかれ、胴上部文様と胴下部地文とを区画している。胴上部には隆線による文様が描かれ、無文部分と楕円形状の縄文部分とを区画し、楕円形の縄文帯が横方向に並列している。

底部資料 (第226 図3)。

3は胴下部に地文(撚糸文)が施文されている。胴下端・底部は無文である。

第7号住居跡

第6号住居跡の東に隣接し、直径5.0~5.3mのほぼ円形のプランを呈し、炉中軸線は北西 -南東の線上を通る。第6号住居跡同様壁の存在は不明確であるが、周溝によりプランの大略を 把握でき、又床面も第6号住居跡よりはやや厚い黄色粘土の張り床によって識別できるが、さ ほどかたくはない。床面は水平ではなく、中央部で周縁部より 4 cm程高い。周溝は幅 20~30 cm、深さ約10cm程で、円形に北側を半周し、南側では部分的に検出された。周溝内には10~ 20㎝の深さでピット状のくぼみが多数みられ、円形といってもかなりの凹凸がある。又住居跡 内部にも第6号住居跡にくらべ多くのピットが検出されたが、配置、深さなどから、炉中軸線 に沿って北側に2個(1.8m間隔で深さ52cm、56cmのピット)南側に2個(1.8m間隔で深さ45 cm、52 cmのピット)存在する4個のピットが一応柱穴と考えられる。両者は2.8m離れて対応し ている。尚、北西ピットは2個のピットが切りあったものであるが、先後関係は明らかでない。 又南西ピットの径が6cmと極めて小さい点に若干の疑念が残る。 他に柱穴と考えられる深さのピ ットが周溝近くに存在する。炉跡(1号炉)は南側に石組部分、北側に埋甕部分をもつ複式炉で平 面形は長径約2.5m、短径約1.0mの楕円形を呈し、長径中央部で両者は50×30 cmの河原石で仕 切られている。 注1) 石組部分は中央部で20㎝程掘りくぼめて小河原石をしきつめ、周囲に大きめ の河原石を配し南側は開く。埋甕部分は径30 cm、現高50 cmの土器の周囲を扁平な大河原石と小 河原石を用いて水平にしきつめ^{注2)}石組部よりもむしろ念入りにつくられているといえる。この ように第7号住居跡内の1号炉跡は第6号住居跡の炉跡とは大きさの点でも形態の点でも様相を 異にする。 ^{注3)}又、北東部周溝より約 40 cm内側に 3 個の小石に囲まれた径 14 cmの小埋甕が発見 されている。ところで1号炉跡の断面図作成のためこれをとり除いたところ、下から中軸線南側 が若干東に寄って2号炉跡が発見された。2号炉跡も長径1.9mほどの複式炉^{注4)}である。 石組部 分は周縁を河原石で囲っただけのものである。 東側を南東部柱穴が少し切っている。 底、壁部は 焼けてかたくしまり、又木炭がはりついた状態で検出されたことから、石が抜きとられたのでは なく、当初から敷かなかったものと考えられる。埋甕は径30 cm、現高20 cmで、周囲には小礫が 雑然と配置されているが、これは1号炉跡構築の際破壊された可能性が強い。両者の間には焼土



が薄く存在するだけで、他の間層はない。この2号炉跡は第7号住居跡と重複した住居跡に付随するものと考えられるがそれに伴う柱穴、周溝等は明らかでない。時期は両者とも出土遺物により縄文中期末の大木10式期のものに相当し、極めて近接した時期の重複と思われる。

(小井川和夫)

- 注 1) 南側にある石組部分、北側に埋甕部分とは敷石石組部・開口石組部、土器埋設石囲部のことである。この炉は前述の3部からなる土器埋設石組複式炉である。炉の長径2.5mと計測されているが、この計測値は以下で述べる床面敷石を含めた数値である。したがって、炉の長径は1.5mである。
- 注2) このことは床面の敷石で、その形状は土器埋設石囲部周辺とその前面にみられる。
- 注3) このことはすでに述べた通り、床面敷石を含めたもので基本的には第6号住居跡の炉と

は大きな違いはみられない。

注4) 土器埋設石囲部・石組部からなる土器埋設石組複式炉である。長径は1.25+ mである。

出土遺物

(後期の土器)

いずれも深鉢である。1・2 は口縁部資料で、1 には弧状の沈線と刻目のついた隆線、刻目の入った長楕円文が、2 には多条沈線文様がみられる。3・4 は胴部資料で、3 には磨消縄文技法を用いた沈線文様が、4 には多条沈線文様が施文されている。

(中期の土器)

〔床付近・床面・炉内〕

深鉢

□縁部資料

a:口縁部が外反するもの(第228図5~8)。

5 は口縁部が外反し、胴中央部で強く脹む。口縁部内面に稜が巡り肥厚する。胴上部には隆線による「S」状文(一部非連結)が描かれ、その外側には縄文が充塡されている。さらに、「S」状文の一部が胴下部に下垂している。7・8 は沈線による文様が描かれ、無文部分を縄文部分とを区画している。区画内に地文(撚糸文)が充塡されている。

6 は隆線が頚部に巡り、口縁部無文と胴部地文とを区画している。

b: 口縁部が直立するもの(第228 図 9・10)。

頚部には隆線(9)、隆沈線(10)が巡り、口縁部無文と胴部地文とを区画している。

胴部資料 (第229図2~4・7・8)

7 は隆沈線による玉抱き文様が描かれ、その外側に地文(縄文)が充塡されている。2・3 は 隆沈線、4 は沈線による文様が描かれ、幅の広い無文部分と地文部分とを区画している。区画 内には縄文(2・3)・刺突文(4)が充塡されている。

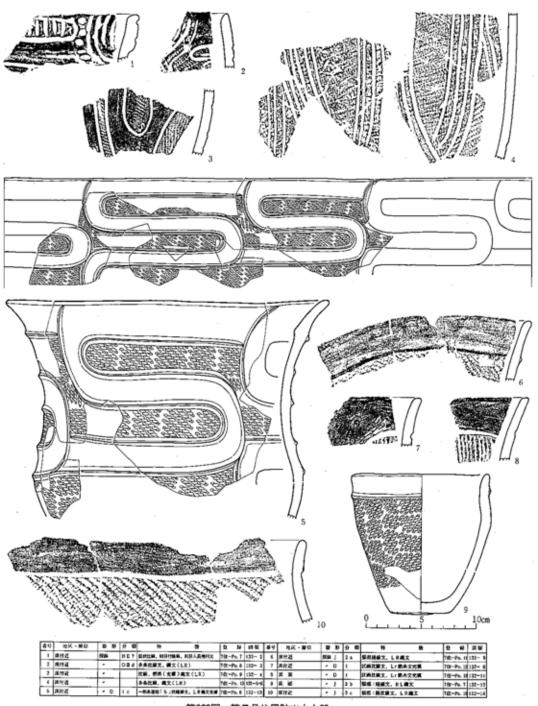
底部資料 (第229図5・6・9~11)

9は胴下部に地文が施文されている。胴下端・底部が無文である。これ以外のものは胴下端・ 底部が無文である。

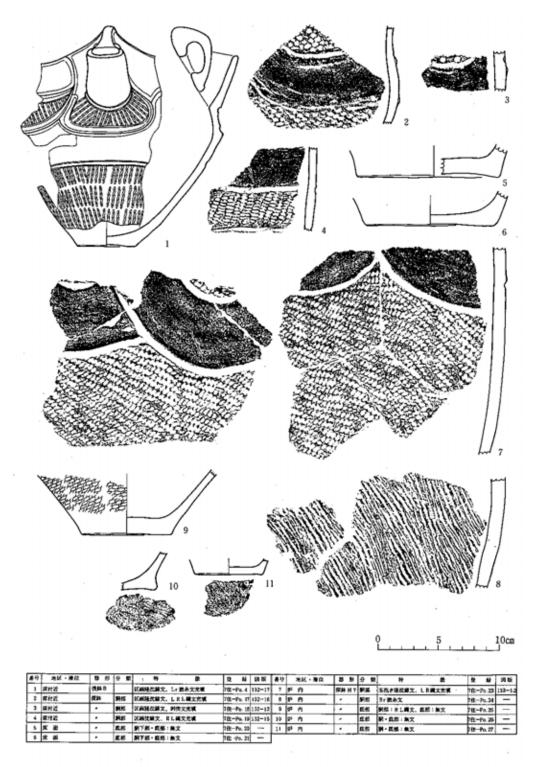
浅鉢

口縁部資料 (第229図1)

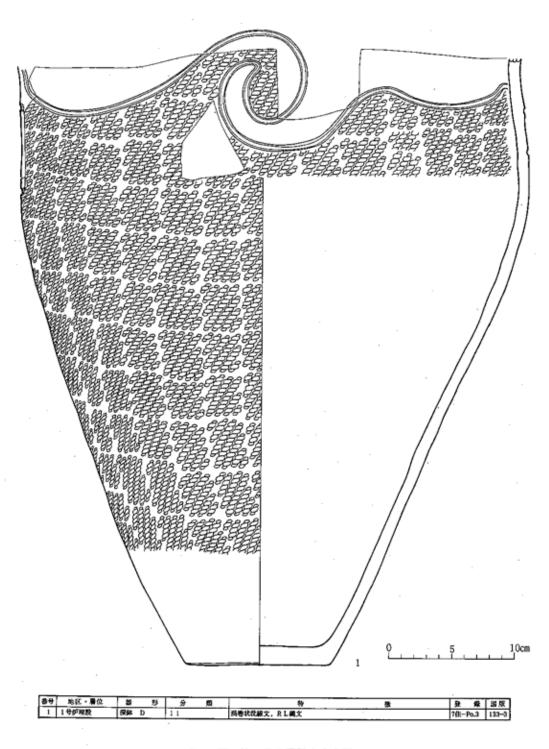
口縁部が内傾している。口縁端部には、波状突起をもつ。突起部は橋状になっており、注口が付く。胴部には隆流線による文様が描かれ、無文部分と地文部分とを区画している。区画内には撚糸文が充塡されている。



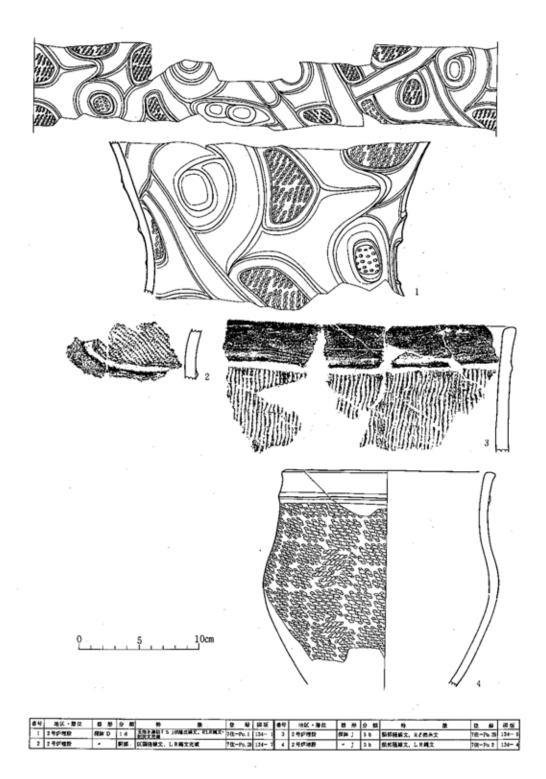
第228図 第7号住居跡出土土器



第229図 第7号住居跡出土土器



第230図 第7号住居跡出土土器



第231図 第7号住居跡出土土器

〔炉・細部〕

深鉢

口縁部資料 (第230図・第231図4)

a:口縁部が外反するもの(第230図)

口縁部が欠損しているが、胴上部には沈線によって渦巻状の文様が描かれ、横方向に展開している。胴下部には地文が施されている。

b:口縁部が直立するもの(第231図4)

口縁部が外傾気味に直立し、胴部が強く脹む。頚部には隆線が巡り、口縁部無文と胴部地文とを区画している。

2号炉

口緣部資料 (第231 図1・3)

a:口縁部が外反するもの(1)

隆沈線による玉抱き連結「S」状文(各部分で連結し、複雑に入り組む玉抱き連結「S」状文)が描かれ、さらに玉抱き連結「S」状文は各部分で円形ないしは楕円形の区画を形成する。 区画外には刺突文・縄文が充塡されている。

b: 口縁部が直立するもの(3)

頚部に隆線が巡り、口縁部無文と胴部地文とを区画している。

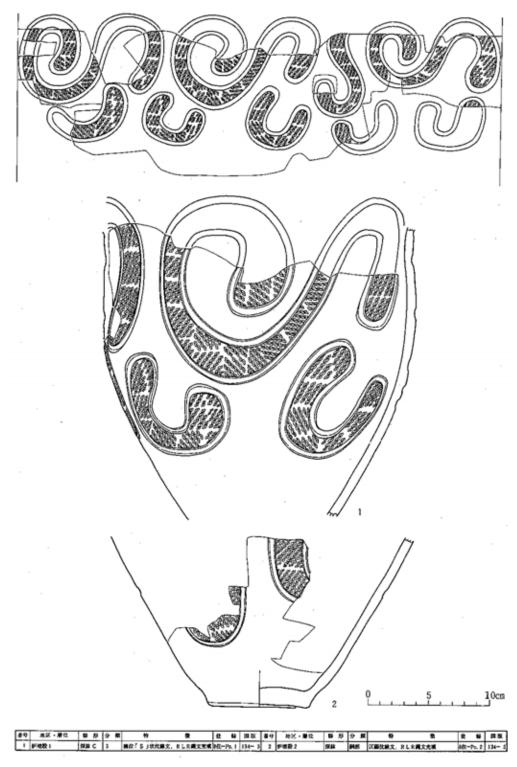
胴部資料 (第231 図2)

隆線による文様が描かれ、無文部分と充塡縄文部と区画している。

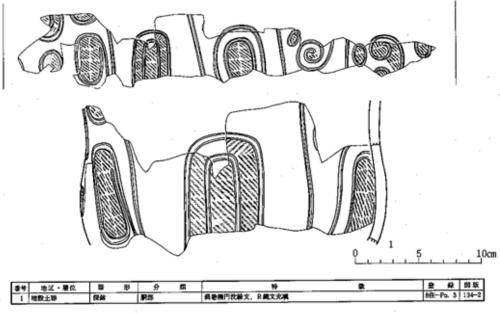
第8号住居跡

長径1.5m、短径1m程の、周囲を小礫で囲んだ複式炉である。石組部分と埋甕部分注は60×50 cmの板石で区別される。石組部分周囲を礫で囲んでいるが中央くぼみに敷石はみられない。これは状況から抜きとられていると考えられる。深さ約40 cmである。埋甕部分には2個の埋甕がたてに並んで配されている。南側の埋甕には内部に石がつま





第233図 第8号住居跡出土土器



第234図 第8号住居跡出土土器

っており、北側の埋甕は底部がない。石は後に落ちこんだものと解されるもので、両埋甕に先後関係は考えられず、断面にも乱れはない。又南側に約50cm離れて石組を伴わない埋甕が検出されている。炉の埋甕に使用されている土器は大木10式である。この炉跡を伴う遺構については周囲が木や作物の根によって相当荒されているので明らかでない。 (小井川和夫)

注) 石組部分と埋甕部分とは敷石石組部・土器埋設石囲部である。この炉は前述の2部からなる土器埋設石組複式炉である。

出土遺物

炉跡 (炉埋設土器)・細部 (埋設土器)から深鉢が出土している。

口縁部資料 (第233図1)

口縁部は欠損しているが、外反するものと思われる。口縁から胴下部には磨消手法による横位「S」状文と「U」状文が幅の広い沈線で描かれ、それらの文様の内部に縄文が充塡されている。文様構成は大きな横位「S」状文が胴部全体に展開し、その下部には小形の「U」状文が描かれている。また横位「S」状文間には一部縦位「S」状文が描かれている。

胴部資料 (第233図2・第234図)

2 は沈線による区画文様が描かれ、その内部に縄文が充塡されている。第 234 図は幅の広い 沈線によって渦巻楕円文・楕円文が描かれ、その内部に縄文が充塡されている。

4. 炉 跡

南側遺物包含層部北半およびその北側、北東側から 10 基の炉跡が検出された。すべて川原石を使用した石組炉である。これらの遺構確認面は第1・2号炉が南側遺物包含層下の基本層位第層面(上面あるいは途中)、第8号炉が第層途中、第9・10号炉が第層面(上面あるいは途中)である。第3~7号炉は第7号住居跡とほぼ重複する場所にあって、同住居跡の炉より高い位置で検出されてはいるが、この地区は基本層位と竪穴住居跡内堆積土とを識別できずに掘り下げている可能性が強いため、炉跡の検出面を基本層位(あるいは重複する住居跡内堆積土)に対比させることができなかった。

第1号炉

G M52 区に位置する。平面形は 80×65 cmの略方形を呈する。北側に 40×50 cmほどの大きな石を斜めに立て、他はいくぶん小さい石を配し、内部に土器を正位に埋めている。 (\pm) 底面中央に焼け面が認められる。掘り方の平面形は不明であるが、南北方向の断面図でみると石組よりかなり大きい南北 (\pm) 105 cmほどの掘り方で、石は掘り方底面に接しており、北辺の石の部分は掘り方が深い。

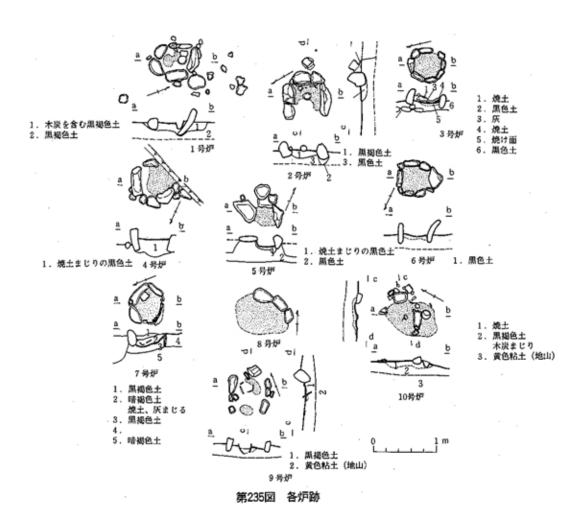
注) この土器は整理の際に確認できなかった。

第2号炉

G P 53 区に位置する。平面形は 80×80 cmほどの西が開いた「コ」字形で、北・東・南辺に約55×20 cmの石を 1 個づつ配しているが、北・東辺は割れている。内部中央に径約10 cmの石や土器片がみられる。これらが遺構を成すものか、炉構築後に流入したものか明確でない。炉底面は東側 2/3 ほどに焼け面が認められる。全体の掘り方は不明であるが、南辺の右の下にはほぼ石の輪郭に沿った掘り方が検出されていることから、他辺も石の部分だけに掘り方が施されている可能性がある。

炉の東外側に接近して土器が出土した。層位的に炉より新しいものである。基本的には遺物 包含層の第2層あるいは第3層に含まれるものと思われる。

第236 図は炉東側出土の土器である。底部を欠く。口縁部がくびれて外反し、山形突起が4個つく。胴上部が張り、以下は直線的にすぼまる。口縁部突起下にはボタン状隆線と沈線の加わった隆線によって「J」字状文が描かれ、頚部に刺突が施されて連鎖状を成す隆線が巡る。胴部には縄文(LR)がみられる。



第3号炉

G R 51 区に位置する。平面形は径約60 cmの円形を呈する。20 cmほどの扁平な石を立てている。底面は全体に焼け面が認められる。炉内には焼土、炭化物、灰が堆積している。掘り方は不明で、炉下部に第7号住居跡の複式炉の石が検出された。遺物は出土していない。

第4号炉

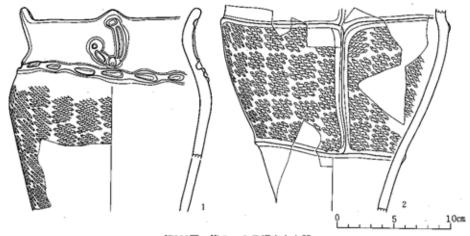
G R 51 区、第3号炉の東側約50 cmに位置する。南辺が未調査のため平面形は不明確であるが、1辺が80 cmほどの略方形と推定される。石は大小不揃いである。底面はほぼ全体に焼け面が認められる。内部に焼土、灰が堆積している。掘り方の平面形は不明であるが、断面図によると石組の輪郭に沿う形と推定される。深さは約25 cmで、石は掘り方底面に接している。遺物は出土していない。

第5号炉

G R 51 区、第3号炉の北約120 cmに位置する。廃棄後に攪乱を受けていると思われ、大小不揃いの石が弧状に配された状態に残存している。東西約70 cmを計る。内部底面には焼け面が認められる。掘り方は不明である。遺物は出土していない。

第6号炉

GR50区、第5号炉の東約2.5mに位置する。平面形は70×60cmの略方形である。扁平な石を立てているが、西辺は大きな石を斜めに据えており、他辺はやや小さな石を2~3個配している。内部底面は全体に焼け面が認められる。炉内には焼土、炭化物が堆積している。掘り方は不明である。遺物は出土していない。



第236図 第2・9号炉出土土器

第7号炉

G R 52 区、第3号炉の西約1.5mに位置する。北辺の一部が土壙によって壊されている。平面形は径約70㎝のほぼ円形である。半円形に石を配し、その対面には土器が弧状にみられる。土器は内外2個体使用されており、平面図に示されている範囲においては内側が倒立、外側が正立している。これらの土器が遺構内に全周していたのか、石組の対面にのみ据えられたのか記録がなく不明である。注)内部底面はほぼ全体に焼け面が認められる。掘り方の平面形は不明であるが、断面図でみる限り土器の部分では土器が掘り方壁面・底面に接しており、石組の部分ではその外側の輪郭より大きいと推定され、石下端は掘り方底面より上である。

埋設土器(第237図1・2):1は口縁部が外反し、胴中央部が強く脹み、胴下部ですぼまる。 胴中央部には隆沈線がひかれ、胴上部文様帯と胴下部地文帯とを区画している。胴上部の文様は「ア」状の無文帯とその外側に充塡された方形状の縄文帯が隆線で区画され、それらの文様が交互に繰り返されて横方向に連続する。施文された地文は区画内、胴下部ともLRL縄文である。

2 は胴下半部を欠く。胴上部から口縁部まで内傾気味に立ち上がる。口縁部に低い山形突起がつき、突起下にボタン状隆線を起点とした「C」字状文が沈線の加わった隆線によって描かれている。頚部には刺突の施された隆線が巡り、胴部に縄文(LR)がみられる。

注) 土器自体は復原の結果、下部を欠いてはいるものの2個体とも全周している。

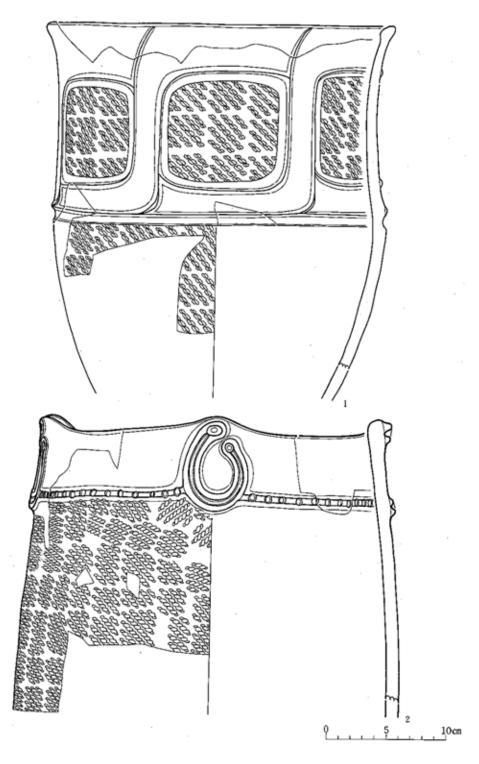
第8号炉

G S 46 区に位置する。石が 3 個弧状に並び、これと接して約 90 x 70 cmの焼け面が認められる。廃棄後に攪乱を受けたものと思われる。掘り方は不明、遺物は出土していない。

第9号炉

GQ47区に位置する。平面形は約80×70 cmの南に開いた「コ」字形を呈する。廃棄後の攪乱のためか石はややまばらに配されている。内部北よりに土器を正位に埋めており、土器の上端は炉底面より約5 cm高く出ている。炉底面には部分的に焼け面が認められる。炉の掘り方は不明である。

埋設土器 (第 236 図 2):口縁部・底部を欠く。胴上部が膨み、胴下部がすぼまる。胴中・ 上部に隆線による大きな方形区画文が施され、区画内に縄文 (L R) が充塡されている。



第237図 第7号炉出土土器

第10号炉

G Q 46 区、第 9 号炉の東約 50 cmに位置する。約 80 \times 60 cmの範囲に焼け面がみられ、不規則に石が並ぶ。すべての石が炉構築時の位置を保っているかどうか不明である。焼け面の南部に土器が埋設され、周囲に土器片が散乱している。 $^{(\pm)}$

注) これらの土器は整理の際に確認できなかった。

5.配石遺構(第1号配石遺構)

調査地区中央部やや北よりに位置し、遺跡内平坦部のほぼ中央にあたる。西半は表土下の基本層位第 層途中から大形の石が検出されるが、表土・第 層が東に傾斜するのに対して配石上端がほぼ水平で、東半では石の上端が表土下部に突き出るものもある。

配石は東西約11m、南北約9mで、平面形はほぼ楕円を呈する。その中でも西半部は半円形に石が密集し、東半部は弧状に石刻がみられるほかは、石の分布がまばらである。この違いは東半部が耕作等の攪乱を受けやすい状況にあるところから、すでに多くの石が抜き取られて現状のような残存状態を示し、本来西半・東半あわせて1つの遺構であると思われる。

石は40 cm前後の大形のものが配され、その間に10 cm前後の小礫がつまっている。石の並びに特に規則性は認められない。すべて川原石を使用している。

西半分では長方形あるいは楕円形の小単位とも見られる部分があるが、単位の輪郭を明確に 把えることができず不明である。また配石のための掘り方は確認されていない。基本層位第 層下の第 層に乗った状態と思われる。

出土遺物は配石遺構部分の第一層にはみられるが、配石中からは出土していない。

埋設土器遺構

配石遺構下で6基の埋設土器遺構が発見された(A~F)。このうちB・C・EとFの一部は遺構の上に石がなく、配石遺構を検出した時点ですでに確認されていた。A・Dは配石を取り除いて検出した。確認面はいずれも基本層位第 層上面と思われる。なお埋設土器上あるいは周囲の配石に他の部分と異った状況は認められなかった。

埋設土器遺構A

掘り方は土器下半に相当する部分のみ検出した。平面形は約80×75cmの不整楕円形を呈する。 深さは約20cmで壁は下端で丸味をもつものの垂直に近い立ち上がりを示し、底面は平坦である。 掘り方底面に粘土を敷き、その上に土器を正位に乗せ、その周囲には褐色土を埋めている。

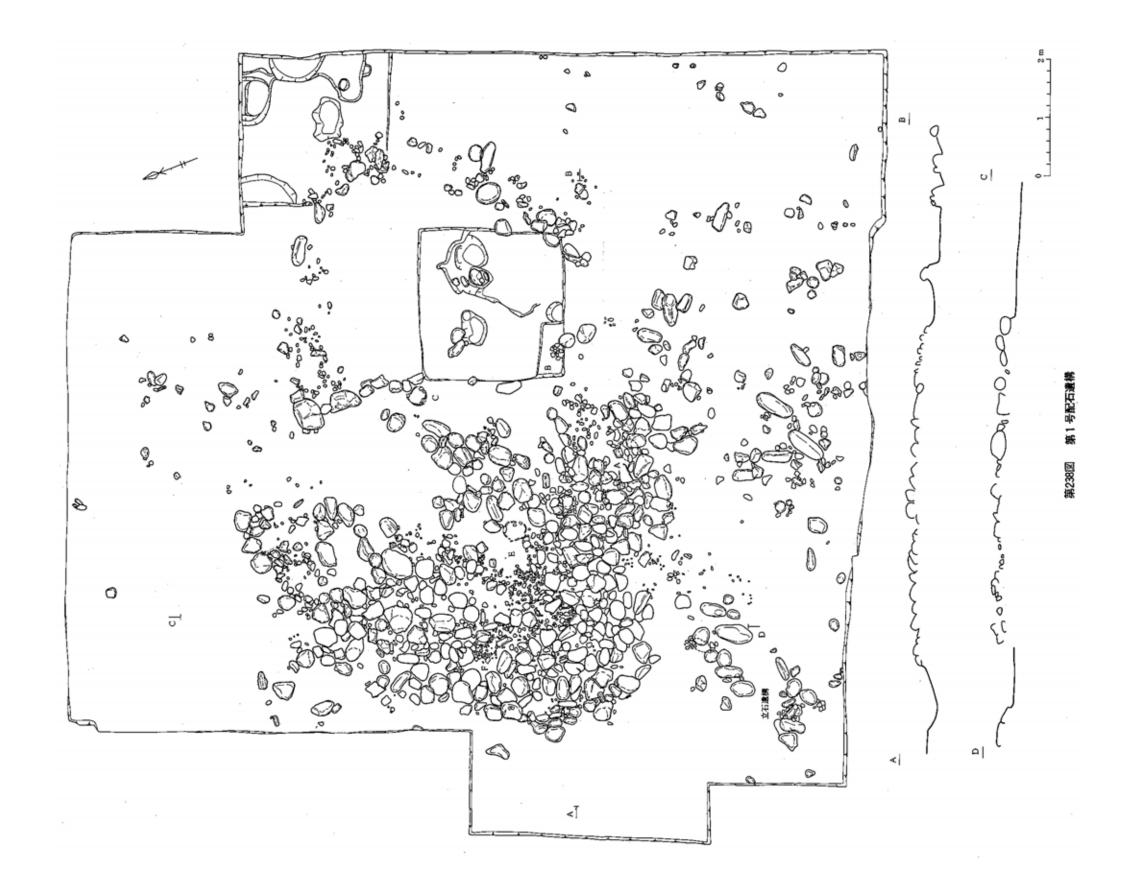
土器 (第 240 図)は深鉢で、口縁部を欠く。胴上部は内弯気味でそれ以下は外傾し、底部は 焼成後に大きく穿孔されている。胴部に縄文 (LR)が施され、文様はみられない。

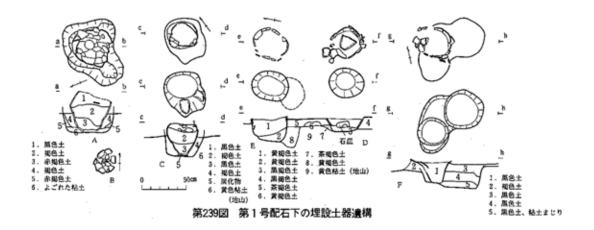
埋設土器遺構B

土器の平面図だけが記録されている。底部に穿孔がみられ、埋設土器と思われるが、立体的 形状、掘り方は不明である。 注) この土器は現存しない。

埋設土器遺構C

掘り方は土器下半に相当する部分のみ検出した。平面形は約50×40cmの一部が張り出した円



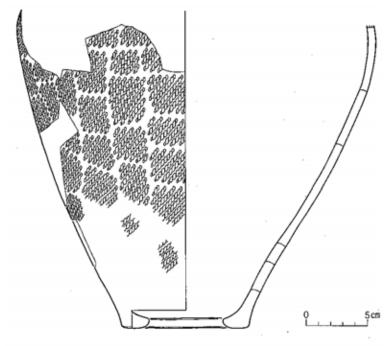


形である。深さは約25 cmで、壁は北部がほぼ垂直、他は斜めに立ち上がり、南部のいくぶん張り出した部分に河原石が2個置かれている。底面は平坦で、中央部に炭化物を薄く敷いてその上に土器を正位に乗せ、周囲に褐色土を埋めている。

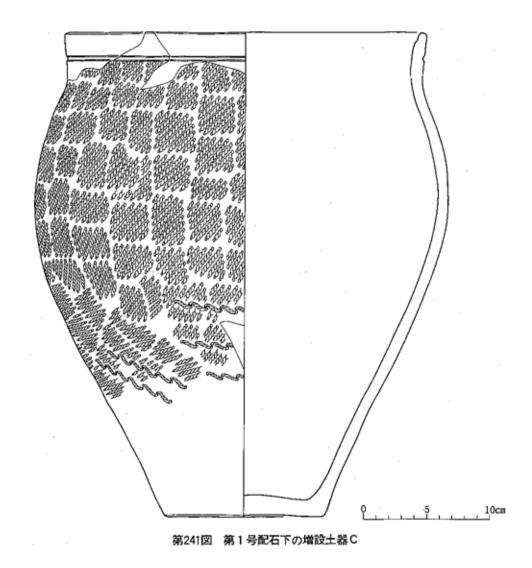
土器(第241 図)は深鉢で、口縁部が直立して胴上部は脹み、それ以下は外傾している。口縁部は無文、頚部に沈線が巡り、胴部に縄文(LR)が施されている。なお底部に穿孔はみられない。

埋設土器遺構D

掘り方は約40×35 cmの楕円形を呈する。深さは約15 cmで壁は斜めに立ち上がり、底面は平坦



第240図 第1号配石下の埋設土器A

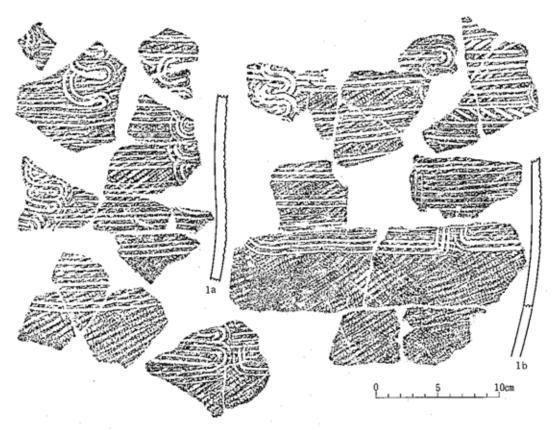


である。底に厚さ5cmほど黒褐色土を埋め、その上に土器を乗せている。土器は断面図でみると底部を欠いており、側面は掘り方壁に接している。また土器内中央の黒褐色土上から石皿が逆さの状態で出土している。石皿は遺構構築に伴って置かれたものか、後に入ったものか不明である。

埋設土器遺構E

掘り方は約 45×30 cmの楕円形である。深さは約28 cmで、壁は下端が丸味をもつもののほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。土器は掘り方上端の壁に接して高さ6 cmほど検出されたに過ぎない。

注) 埋設土器遺構D・Eの土器および石皿は整理時に確認できなかった。



第242図 第1号配石下の埋設土器 F

埋設土器遺權F

本遺構は他のピットと重複しており、土器が壊されていない点からみて他のピットを切って 構築されたと思われるが、掘り方全体の平面形は記録されていないため不明である。東西方向 の断面図によると、底部を欠いた土器が掘り方底面に接して正位に立てられ、東部は土器側面 が掘り方壁に接しているものとみられ、西部は土器下部よりいくぶん離れて掘り方下部の壁が 立ち上がり、その上部は不明である。また西上部の土器は壊れて横に倒れている。検出された 土器の大きさは平面で約45×35 cm、深さ約23 cmである。

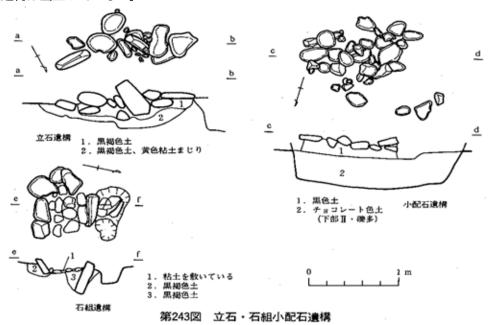
この土器(第 242 図)は整理時に接合せず、拓本で示した。胴部上半が残存している。深鉢であり、残存部はわずかに脹みをもって立ち上がる単純な器形で、縄文が施され、上半には横位の重層する多条沈線を下垂あるいは連続「S 字状沈線で縦位に区切る文様が施文されている。

6. 立石遺構

HH55区、第1配石遺構の南西側に位置する。遺構は約160×70㎝の東西に細長い範囲に残存する。中央に柱状の角礫を立て、ほぼそれに接して小礫を置き、周囲に扁平で大きな川原石を配している。周囲の石は、西側では横に敷かれた様な状態であるが、東側は中央に向って傾いている。東側の石は、中央の角礫が東に傾いているところから本来垂直に立っていた角礫が傾いたのに伴って動いたことが考えられる。

掘り方は平面形が明らかでないが、断面図でみると東西約1.7m、深さ約30cmの皿状を呈しており、石は掘り方をいくぶん埋めてから据えられている。

遺物は出土していない。



7. 小配石遺構

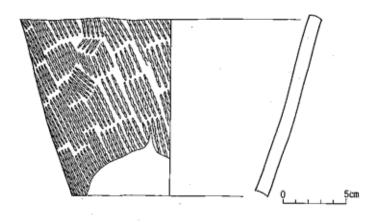
GN45・46 区にかけて位置し、基本層位第 層上面で確認された。約140×120 cmの範囲に約10~30 cmの大きさの川原石が配されている。配石の下部で土壙が検出されている。本来石組に伴うものと思われるが、土壙の輪郭は配石下約10 cmで確認された。平面形は不明である。土壙内堆積土は粘土質のチョコレート色土である。人為的堆積と考えられる。遺物は出土していな

ll.

なお、調査区内には所々にこの小配石遺構に類した石の分布する個所がある。主に第1号配石遺構の周囲や第4号住居跡の東側にみられ、概報では配石遺構として扱われているものもあるが、いずれも遺構としての単位を把えることが難しく、また断面図などの記録が欠けていることなどもあって、その内容は不明と言わざるを得ない。

8. 石組遺構

HT48区、第4号住居跡東部に位置し、同住居跡を壊して構築されている。基本層位第 層で確認された。約100×80㎝の東が開いた「コ」字形に大きな川原石が配され、内部底面に粘土と小石を敷いている。南北方向の断面図によると、北・南辺では石の部分にのみ深い掘り方がみられる。焼土、焼け面等は認められない。遺構内から遺物は出土していない。なお北に接してピットがあり、土器が出土しているが、本石組遺構との新旧関係は不明である。このピット出土土器(第244図)は胴部片で、撚糸文(L)が施されている。



第244図 石組脇ピット出土土器

9. 埋設土器遺構

第1号配石遺構下で検出された6基以外に、南側包含層下の2基を含めて調査区南半から13基の埋設土器遺構が単独で発見された。これらの遺構確認面は第8・9・10号が基本層位第 層面(上面あるいは途中)、第4・6・7・11・12・13号が基本層位第 層上面、第5号は地山(第層)面である。また第1・2・3号は第3~7号炉周辺にあり、それらの炉と同様の理由によって確認面は不明である。

第1号埋設土器遺構

G T 51 区に位置する。土器の存在を確認した段階では掘り方を検出できなかったが、土器下部に至り径約40 cmの円形で深さ約10 cmの掘り方が検出された。土器は正立やや斜めに設置されている。断面図が作製されておらず、掘り方埋め土等の状況が不明である。

埋設土器(第246 図):底部を欠く。胴部はわずかな脹みをもって立ち上がり、口縁部で内弯 気味となる単純な器形の深鉢である。口縁部にごく低い突起がついてその頂部から頚部まで弧 状隆線が下り、頚部を巡る隆線に接続する。胴部には撚糸文(L)が施されている。

第2号埋設土器遺構

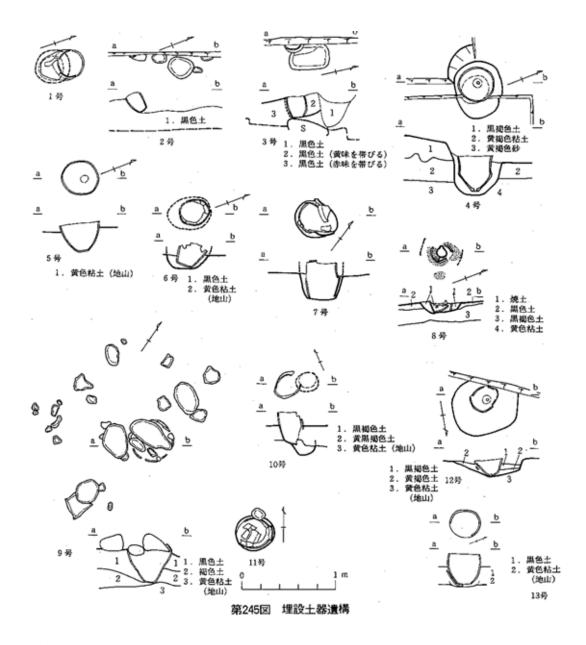
G T51 区、第1号埋設土器遺構の西約1.6mに位置する。断面図でみる限り、層の上面に生じた段に土器側面が乗る形で検出されている。したがって、土器は「埋設土器」として取り上げられてはいるものの、遺構が否か不明である。

(埋設)土器(第 247 図 2): 胴部から口縁部までわずかに脹みをもって立ち上がり、口縁部に 山形突起が3個つく。無文である。なお底部に穿孔は認められない。

第3号埋設十器遺構

G R51 区、第2号埋設土器遺構の南約3.6mに位置する。掘り方を平面的には確認していないが、断面図によれば北部はピットによって壊されており、南北約30 cm残存し、深さ約25 cmである。土器は掘り方底面に乗り、側面は掘り方南壁に接するものと思われる。掘り方埋め土は黒色土である。

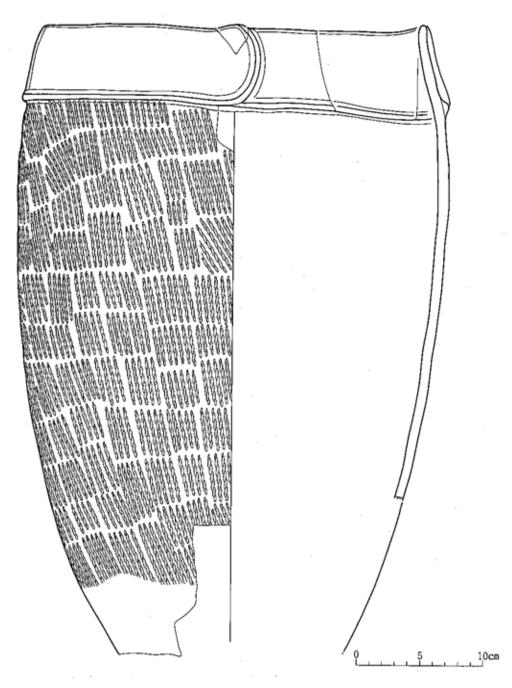
埋設土器(第 247 図 1): 底部を欠く。胴部はわずかに脹みをもって立ち上がり、口縁部が外 反気味になる。4 個の低い山形突起がつき、突起頂部から頚部まで盲孔、沈線の加わった弧状 隆線が下る。頚部には隆沈線が巡り、弧状隆線下の胴部には磨消縄文技法を伴った三条の平行 沈線が、その中間にはジグザグ文が下垂する。縄文はLRである。



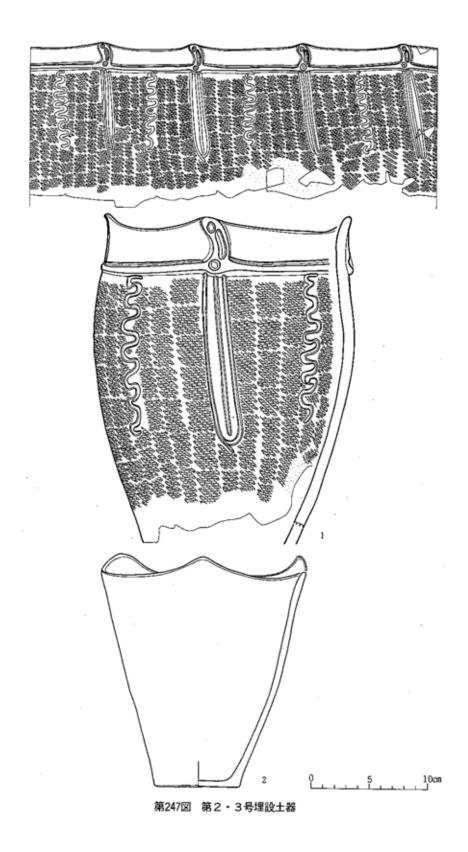
第4号埋設土器遺構

G K 56 区に位置する。掘り方の平面形は約85 x 60 cmの楕円形を呈する。深さは約60 cmで、壁の立ち上がりは下半がほぼ垂直、上半は斜めであり、底面は丸く凹む。土器は掘り方の中央に正立し、底部は掘り方底面より約5 cm上である。

埋設土器(第248図):口縁部が外反し、胴部中央が強く脹み、胴下部ですぼまる。胴部中央 に隆線が巡り、胴上部文様帯と胴下部地文帯とを区画している。また、胴上部の文様帯は口縁



第246図 第1号埋設土器



下部に巡る隆線によって口縁部無文帯とを区画している。胴上部の文様は非連結「」状・変形「」状の無文帯とその外側に充填された刺突文が隆線で区画され、それらの無文帯が横方向に並列している。無文帯の末端は鰭状の隆線となっている。文様を描いた隆線は稜線で鰭状部分の隆線は特に高くなっている。胴下部にはLR縄文が施文されている。底部は焼成後に穿孔されている。

第5号埋設土器遺構

G051 区に位置する。地山面で土器が検出された。土器は正立しており、掘り方は土器に沿った形態と推定される。

埋設土器(第239図1):胴下半から底部が残存する。上部に隆線が巡り、以下に縄文(LR)が施されている。底部に穿孔は認められない。

第6号埋設土器遺構

GM45区に位置する。残存する掘り方は平面形が約45×40cmの楕円形、深さは約15cm(土器上端からは約30cm)で壁・底面とも丸味をもつ。土器はわずかに傾いており、底部は掘り方底面より数cm上である。掘り方埋め土は黒色土である。

埋設土器(第 249 図 2):胴部下半から底部が残存する。中位に隆線が巡り、それ以上に縄文(LR)が施され、以下は無文である。底部に穿孔は認められない。

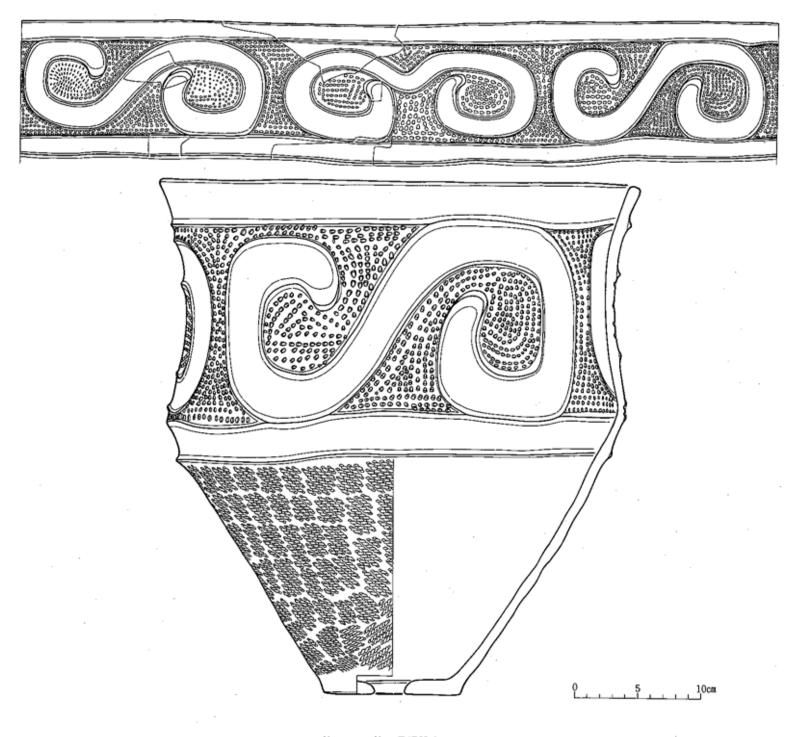
第7号埋設士器遺構

GN46 区、第6号埋設土器遺構の北約4mに位置する。残存する掘り方は平面形が径約45cmの円形であり、土器よりわずかに大きい。深さは約30cm(土器上端からは約40cm)で壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。土器は正立し、下端は掘り方底面に接する。上端部(口縁部)は壊れて内部に倒れている。

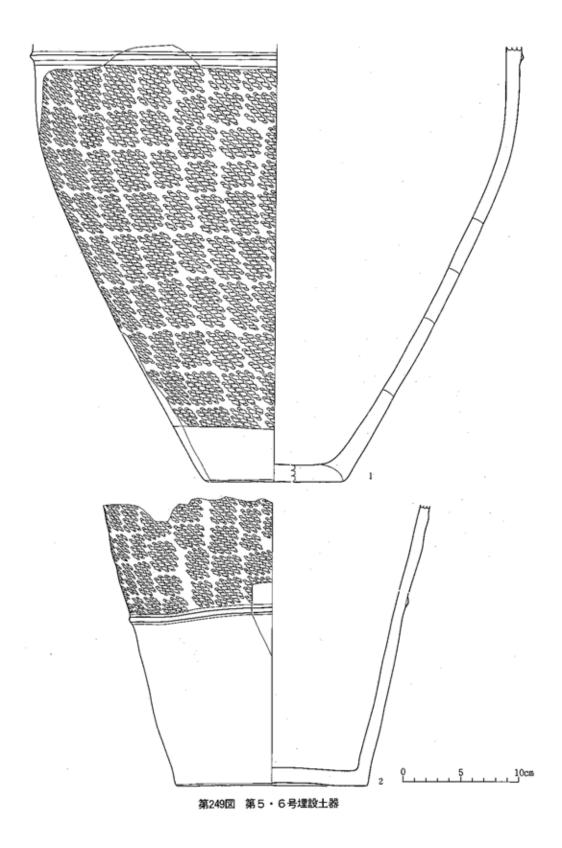
埋設土器(第250図):口縁部が直立し、胴中央部が僅かに脹み、胴下部ですぼまる。胴上部の文様は玉を抱いた無文帯と楕円状の充塡縄文帯が隆・沈線で区画され、それらの文様が交互に繰り返されて横方向に連続する。玉を抱いた無文帯の外側には刺突文が充塡されている。文様を描いた隆沈線は隆線部分が稜線で、沈線と同様に研磨されている。施文された地文は区画内、胴下部ともL撚糸文である。底部を欠いている。

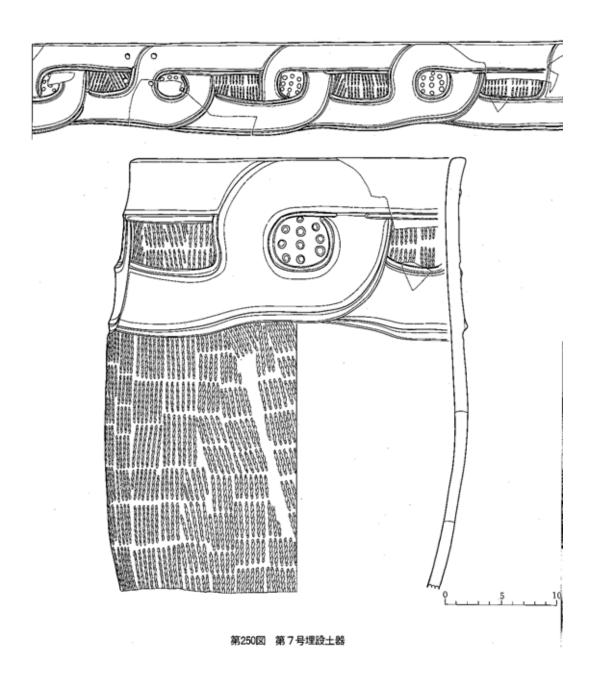
第8号埋設土器遺構

G P47 区に位置する。掘り方の平面形は不明であるが、断面図によると南北約 45 cm、深さ約



第248図 第4号埋設土器





10 cmの皿状を呈する。土器は掘り方中央にあり、下端は掘り方底面に接している。土器の周囲は焼土が堆積している。また土器内部には土器片とともに焼土が堆積している。

(注) 埋設土器および埋設土器内の土器片は整理時に確認できなかった。

第9号埋設土器遺構

GQ46区、第8号埋設土器遺構の北東約6.5mに位置する。掘り方はほぼ土器に沿う形態と思われる。土器の大きさは径約48cm、深さは断面図で約42cmを計るが、実測図作製の段階ですでに土器の口縁部を取り除いており、実際はそれ以上になる。また土器内上部に河原石が入っており、埋設土器遺構上に構築された配石が落ち込んだものである可能性が強い。しかし、埋設土器遺構周辺を含めた同一面上に残存する石の分布はまばらで、配石として遺構の単位を把えることはできない。

埋設土器(第251図):深鉢形土器である。口頚部が「く」字状にくびれて外反し、口縁上部はほぼ直立する。台形の突起が4個つく。胴上部は内弯し、以下外傾する。底部に穿孔は認められない。文様は口縁部と胴部にみられる。口縁上部から突起にかけては渦文と弧状文およびそれを結ぶように平行線が走る。口縁下部には下垂隆線が突起下に施されている。胴部には縄文(LR)を地文として多条沈線による半円・弧状文が描かれている。

第10号埋設土器遺構

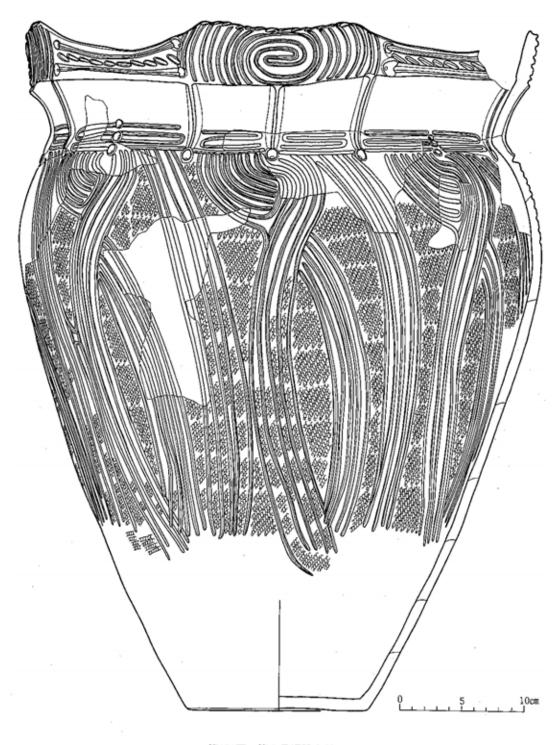
G S 46 区、第9号埋設土器遺構の北約3mに位置する。土器は正立しているが掘り方は確認できなかった。しかし土器下部より浅い落ち込みが検出され、土器の中心からはずれるものの、掘り方下端部と思われる。

(注) この埋設土器は整理の際に確認できなかった。

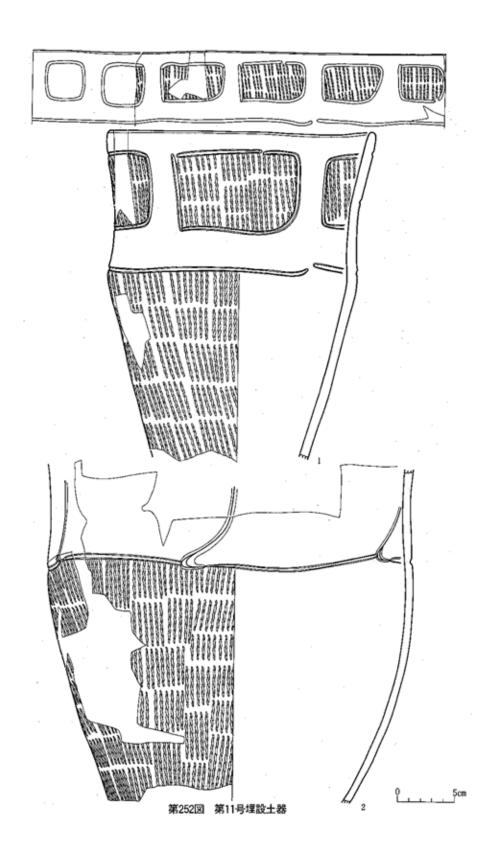
第11号埋設土器遺構

H D 45 区に位置する。掘り方は径約 40 cmの円形で深さ約 35 cmあり、土器よりわずかに大きい。土器は正位に埋設されている。土器内部に別の個体が入っているが、出土状況が不明なため遺構の構造に係るものか、後に流入したものか明らかでない。また断面図、遺構内堆積土の記録は残されていない。

埋設土器(第 252 図 2):口縁・胴下部が欠損している。胴上部には隆・沈線によって文様が描かれているが欠損部分が多いため、全体の文様は不明である。胴下部にはR撚糸文が施文さ



第251図 第9号埋設土器



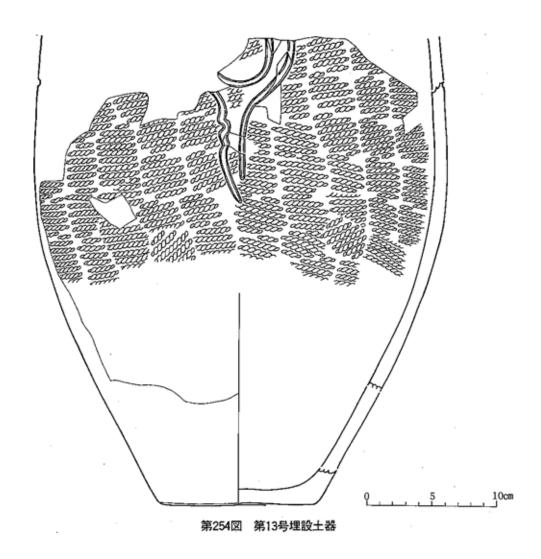


れている。

出土土器(第 252 図 1): 口縁部が外傾し、胴部中央が僅かに脹らみ、胴下部ですぼまる。胴部中央には沈線がひかれ、胴上部文様帯と胴下部地文帯を区画している。胴上部の文様は幅の広い無文帯と方形状の充塡縄文帯が沈線で区画され、方形状の充塡縄文帯が横方向に並列している。施文された地文は区画内・胴下部ともL撚糸文である。

第12号埋設土器遺構

HD47区、第11号埋設土器遺構の西約6mに位置する。掘り方は南端部が未調査であるが、



径約70 cmのほぼ円形、深さは約20 cmである。土器は正立し、底部を掘り方底面に接して埋設されている。掘り方埋め土は黒褐色土、黄褐色土である。

埋設土器(第253図):口縁部を欠く。胴部はわずかに脹みをもって立ち上がる。底部に焼成後の穿孔が認められる。胴部には縄文(LR)が施されている。

第13号埋設土器遺構

HF49区に位置する。土器は正立しているが、掘り方は確認できなかった。しかし土器下の 地山面が凹んでおり、この凹みが掘り方底面であると推定される。

埋設土器(第254図):口縁部を欠く。胴部はわずかに脹みをもって立ち上がる。底部穿孔はない。胴上部に平行線が下る「U」字状の文様が磨消縄文技法(縄文LR)を用いて描かれている。

10.土 壙

土壙およびピットは調査区中央部のHA区からIB区にかけて多数発見されている。規模、 平面形態は多様であり、その多くは遺構内部、堆積土の状況等が不明である。そのため、ここ ではそれが比較的明らかな3基の土壙についてのみ記述する。

3基ともGR・GS46・47区に近接して位置しており、確認面は第1号土壙が基本層位第層途中、第2・3号土壙が第層上面である。

第1号土壙

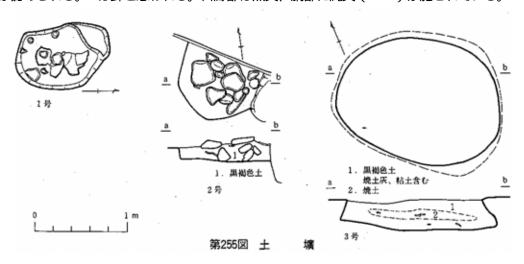
平面形は約 110×70 cmの不整楕円形である。深さは約 23 cmであるが底面北部に段がつく。 土壙内堆積土の中・上位に土器片・石が面を成して出土している。

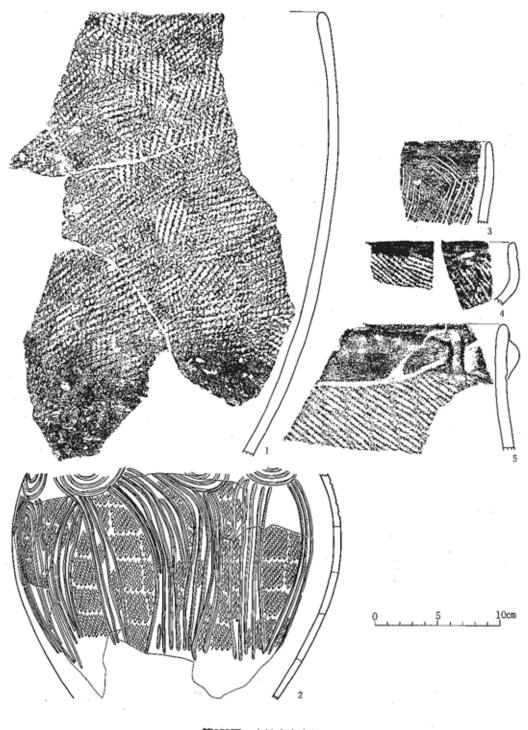
出土土器(第 256 図): 1 は胴部から口縁部までわずかに脹みをもって立ち上がる単純な器形である。口縁・胴部に縄文(LR)が施されている。2 は胴部資料である。上部が内弯する。 縄文(LR)を地文として多条沈線による円文から弧状線が下垂する文様が描かれている。

第2号土壙

北部は未調査であり、東部は他の土壙に切られている。東西約 90 cm残存し、平面形は円形 基調と思われる。深さは約 15 cmで、壁は垂直、底面は平坦である。堆積土は単層で多量の河原 石と土器を少量含む。人為的堆積と思われる。

出土土器(第256図):3・5 は単純な器形の深鉢である。3 は口縁部に高く盛り上がった下垂する隆線がみられ、頚部に沈線が巡り、胴部に縄文(LR)が施されている。3 は撚糸文(R)が認められる。4 は鉢と思われる。口縁部は無文、胴部に縄文(LR)が施されている。





第256図 土壙出土土器

第3号土壙

平面形は約186×148 cmの不整楕円形である。深さは最も深い北辺で約60 cmである。壁が内傾し底面はほぼ平坦でいわゆるフラスコ状を呈する。堆積土の状況は明確でないが、その下部は中央が高くて周囲壁際が低くなるフラスコ状土壙特有の自然堆積と思われる。

(注) 本土壙内より土器片が若干出土しているが、整理の際に確認できなかった。

11. 溝状遺構

調査区北端で2本の溝が検出された。いずれも東西に走るが、北側の溝は調査区外に続くため内容は不明である。南側の溝は幅約1m、深さは最深部で1mに達し、断面形は「U」字形あるいは「V」字形を呈する。IH54区からIG51区まで続き、さらにIG48区でも溝の一部を検出しており、東西に長く伸びるものと思われる。溝内の堆積土は下部が地山崩壊土で、上部に北側遺物包含層が形成されている。

12. 堆積層出土土器

基本層位第 ・ 層からは縄文土器、土製品、石製品が出土している。第 6・7 号住居跡付近では層位の把握が不十分であったため遺物が混在して取り上げられていると思われ、第 3 号石組下の遺物取り上げ層位は基本層位と対比させることができない。また第 6・7 号住居跡の東部は 2 枚の遺構面が確認されている。これらのことから、基本層位第 ・ 層出土遺物は、第 6・7 号住居跡周辺の「GQ~GT・50~53区」、「第 3 号石組下」、東部の「GL~GT・45~49区」、その他の「I・H区」の 4 地区に分けて説明する。なお土器以外の遺物は別項に一括した。

GQ~GT・50~53 区出土土器

中期の土器

深鉢

口緣部資料 (第257 図、第258 図1~5)

a:口縁部が外反するもの(第257図1~12)

1 は磨消手法による連結「S」状の無文帯とその外側に充塡された縄文帯が隆線で区画され それらの文様が横方向に展開している。6 は玉抱き無文帯とその外側に充塡された縄文帯が隆 沈線で区画されている。2~5・7~12 は隆線・隆沈線・沈線によって区画文様が描かれている。

b:口縁部が外傾し、胴部が緩やかに脹むもの(第258図3)

磨消手法による「ノ」状の無文帯と不整方形ないしは楕円形の充塡縄文帯が沈線で区画されている。「ノ」状無文帯の結合部は鰭状の隆線となっている。この鰭状隆線と突起部から下垂し、頚部に巡る隆線に沿って刺突文が加えられている。

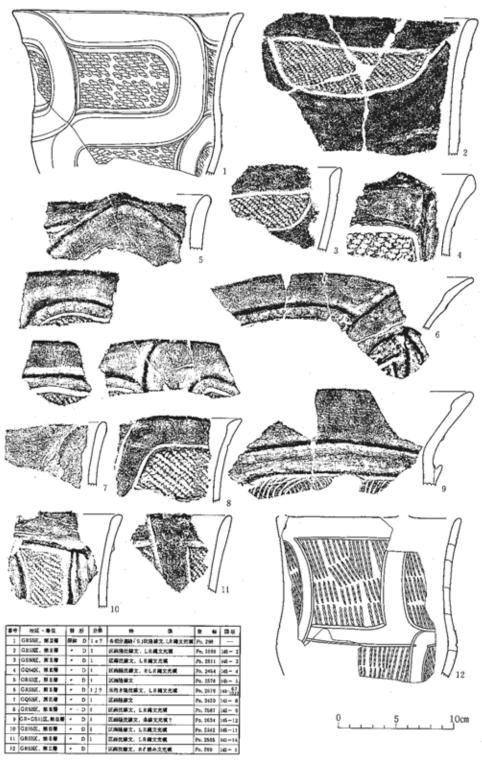
c:胴部から口縁部まで直線的に外傾するもの(第258図1・2)

1 は平口縁で、2 個の小波状突起をもつ。小波状突起間の文様は渦巻状円文(無文帯)とその外側に充填された円形刺突文が隆沈線で区画され、それらの文様が横方向に展開する。この渦巻状円文帯の末端は鰭状の隆線となっている。2 は小波状突起をもつ。この突起部から下垂し、頚部で巡る隆線に沿って刺突文が加えられている。胴部の文様は幅の広い無文帯と充塡縄文帯が沈線で区画されている。

d: 口縁部が直立するもの(第258 図4・5)

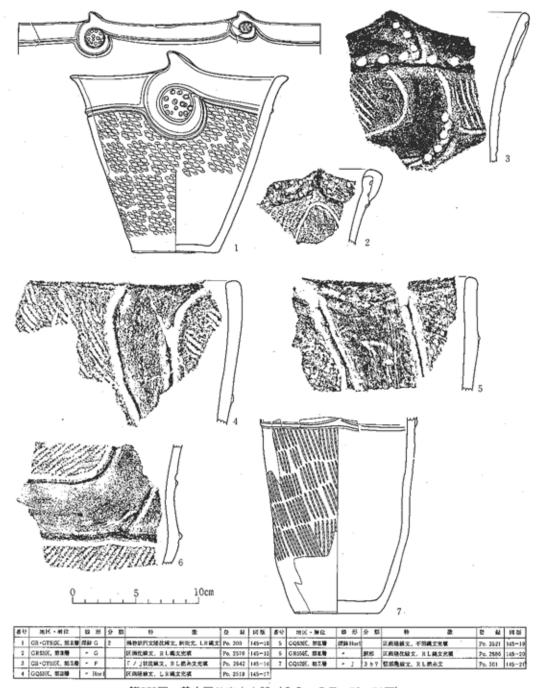
4・5 は幅の広い無文帯と充塡縄文帯が隆線で区画されている。

胴部資料 (第258図6・7)



第257図 基本層位出土土器 (GQ~GT·50~53区)

6は幅の広い無文帯と充塡縄文帯が隆沈線で区画されている。7は頚部に隆線が巡る。



第258図 基本層位出土土器 (GQ~GT·50~53区)

後期前葉の土器

第層出土土器

口緣部資料 (第259図1~12、第260図)

いずれも深鉢である。

- a、第259図1:胴部中位に稜がついてそれ以上が外反気味に立ち上がる器形と思われる。 方形区画文が施文されている。
- b、第259図2・4:胴部中位がくびれてそれ以上が外反する器形である。2は口縁端部が内傾する。4は高い突起がつき、窓が開く。2・4とも口縁部から胴部にかけて文様が施される。
 - c、第259図3・5:頚部が「く」字状にくびれる器形と思われる。口縁部破片である。
- d、第259図6~12、第260図:口縁部、胴部がわずかに脹みをもって立ち上がる器形である。第260図は胴上部から口縁部にかけて内弯気味になり、山形突起がつく。突起から頚部へ隆線が下垂し、頚部の隆線はその部分で連鎖状になる。胴部には突起下に蕨手文類似の文様が4単位、さらにその中間に平行線文が4単位配されている。第259図6・7は口縁部破片で、6の胴部に蕨手文がみられる。第259図10は口縁部に連続刺突文が施されている。同図11・12は口縁部、胴部が地文(縄文)である。

胴部資料 (第259図13~18、第261図1・2)

いずれも深鉢である。13 は頚部が「く」字状にくびれる器形と思われ、横位展開の文様がみられる。15 は口縁部までわずかに脹みをもって立ち上がる器形と思われ、蕨手文状の文様が施されている。14・16~18、1・2 は口縁部の器形を推定できない。多条沈線文様が施されている。

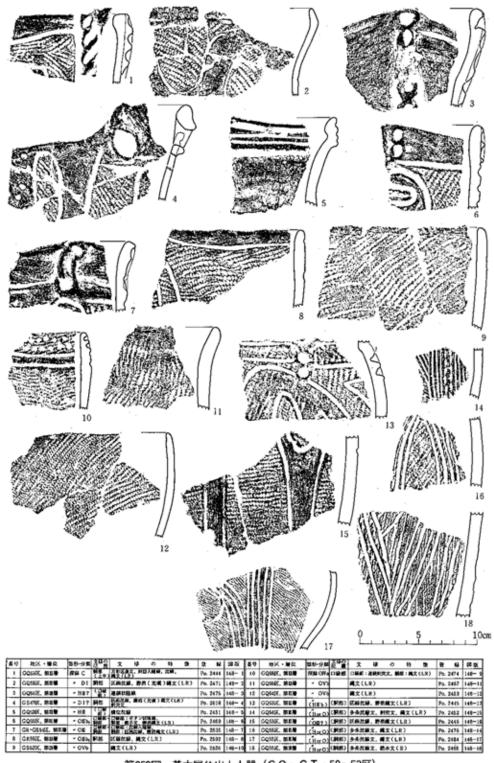
底部資料 (第261図3)

器形は不明である。底面に網代痕が認められる。

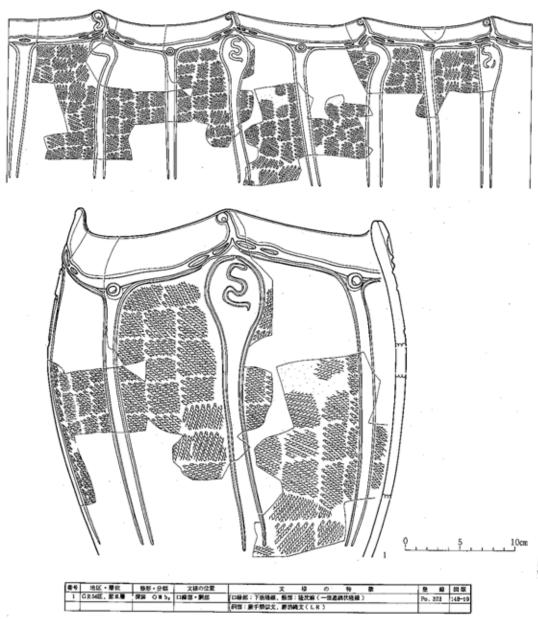
□縁部資料

深鉢(261図4~第265図)

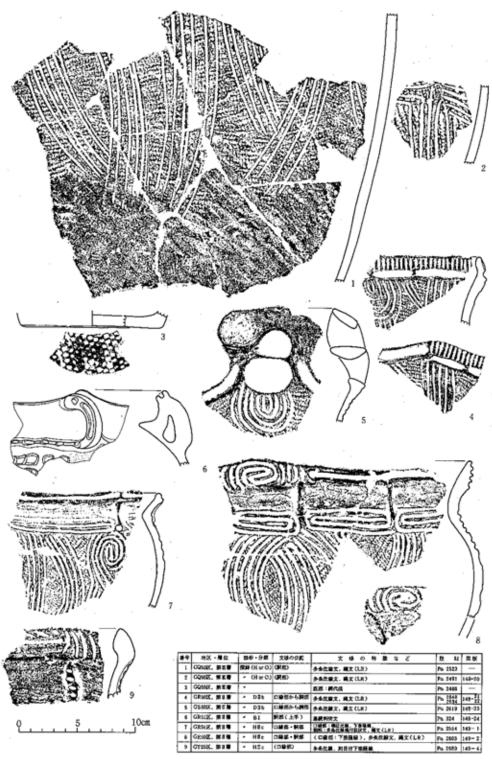
- a、第261 図4・5:胴部中位がくびれてそれ以上が外反する器形である。口縁端部が内傾し、 5には上下の窓をもつ大きな突起が付く。口縁部から胴部にかけて多条沈線文様がみられる。
- b、第 261 図 6:胴上部が張る器形である。口縁部は「く」字状を成し、内面に鋭い稜がみられる。山形突起がついてその下に橋状把手がある。胴部に連続刺突文が施文されている。
- c、第 261 図 7~9、第 262 図 1~4: 頚部が「く」字状にくびれる器形である。7~9、1 は多条沈線文様がみられ、2~4 は胴部文様が不明である。



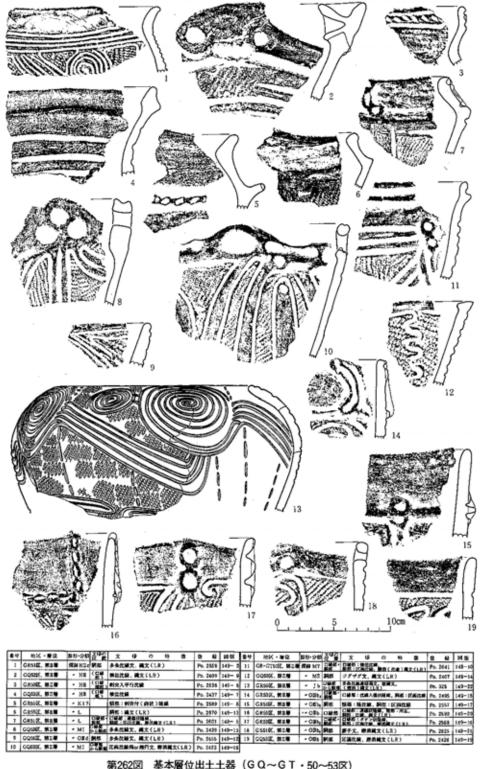
第259図 基本層位出土土器 (GQ~GT・50~53区)



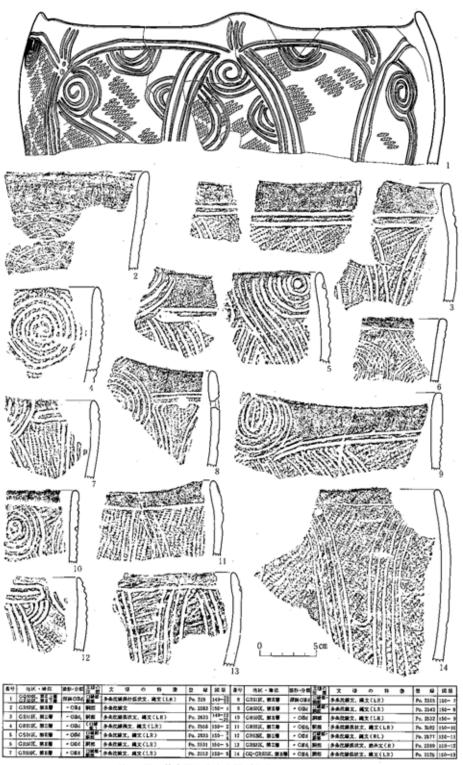
第260図 基本層位出土土器 (GQ~GT・50~53区)



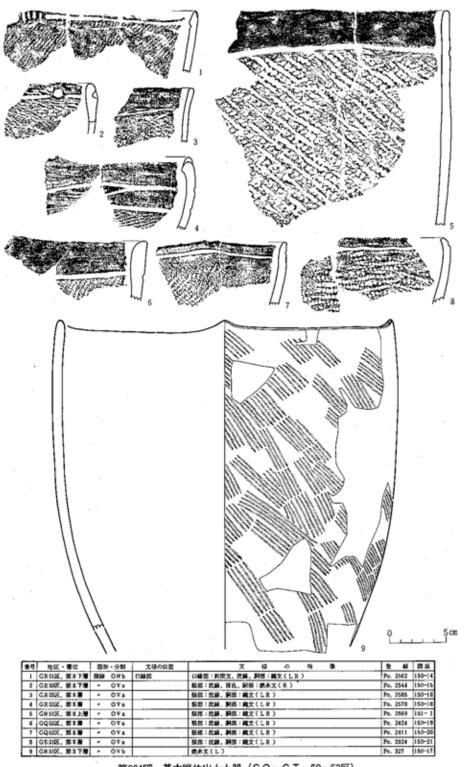
第261図 基本層位出土土器 (GQ~GT·50~53区)



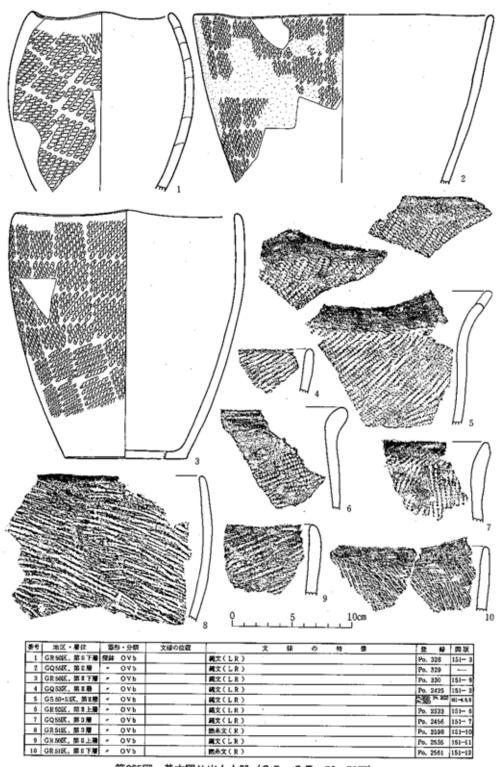
第262図 基本層位出土土器 (GQ~GT・50~53区)



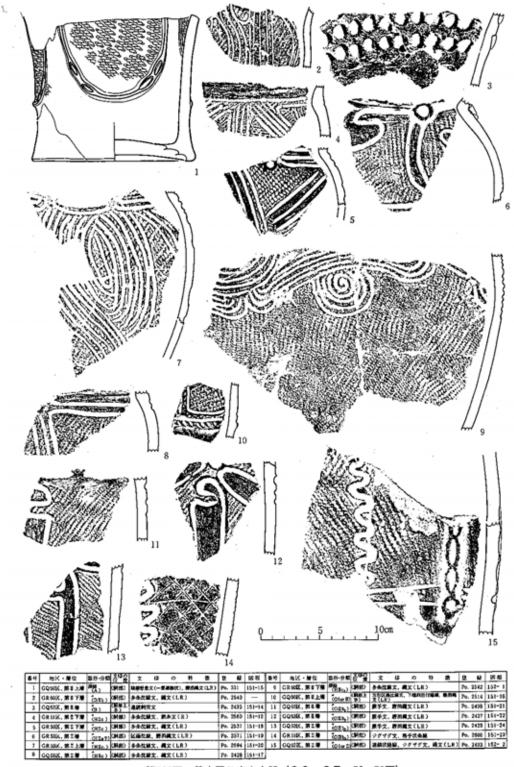
第263図 基本層位出土土器 (GQ~GT・50~53区)



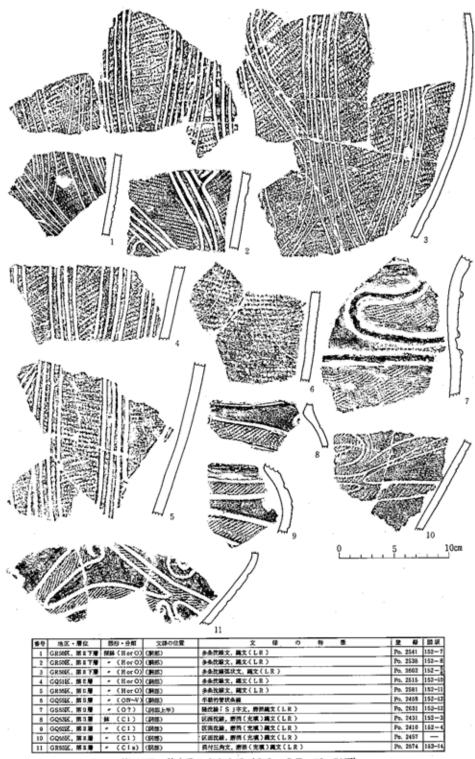
第264図 基本層位出土土器 (GQ~GT·50~53区)



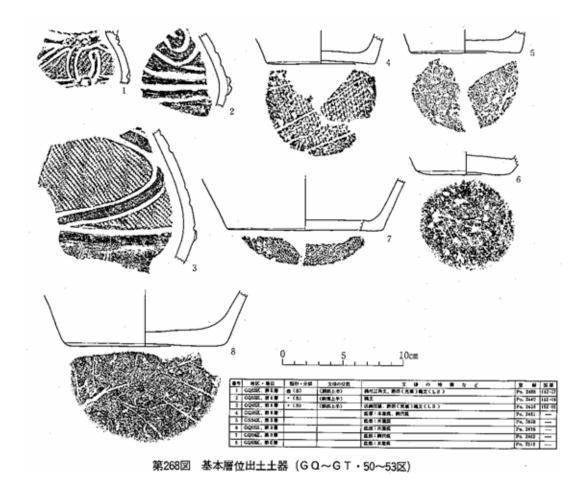
第265図 基本層位出土土器 (GQ~GT・50~53区)



第266図 基本層位出土土器 (GQ~GT·50~53区)



第267図 基本層位出土土器 (GQ~GT・50~53区)



- d、第262図5:口縁部が内反し、頚部に鍔状の稜がつく。稜の上に劾目が施されている。
- e、第262図6・7:口縁部が内傾する器形である。端部は段を成し、頚部に稜がついて胴部は直線的に外傾する。7の胴部には平行線がみられ、6は文様の有無が不明である。
- f、第 262 図 8・10・12:口縁部、胴部が直線的に外傾する器形である。8・10 は口縁端部が肥厚して段がつき、窓の開いた突起がみられる。口縁部から胴部にかけて文様が認められる。12 は口縁端部が削がれたように三角を成す。胴部にジグザグ文が施文される。また同図 11 も同様の器形かも知れない。
- g、第262図13:胴上部から口縁部にかけて内弯する。口縁部から胴部にかけて斜行線によって連結される渦文が多沈線によって描かれている。
- h、第 262 図 9、14~19、第 263 図~第 265 図:口縁部・胴部がわずかに脹みをもって立ち上がる器形である。低い山形突起をもつものが多い。

第262 図9・14~19、第263 図は胴部に文様をもち、また口縁部にも突起下に文様の施文され

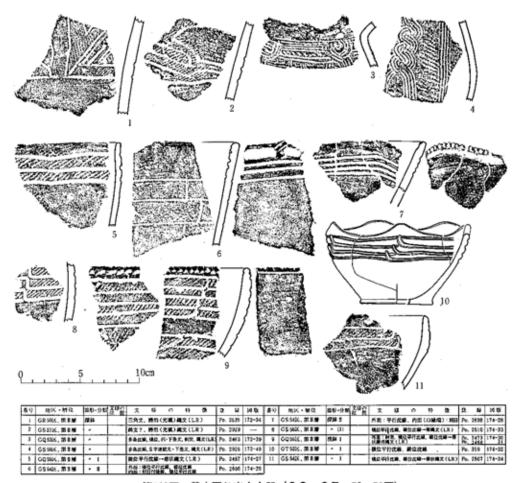
るものもある。第 262 図 14~19 には蕨手文などが、第 262 図 9 と第 221 図には多条沈線文様が みられる。

第264 図1 は口縁部に横位沈線と刺突文が施される。また第264 図2~9、第265 図は口縁部、 胴部が地文あるいは無文である。第264 図2~8 は沈線で頚部が画されている。

胴部資料

深鉢(第266図、第267図1~7)

- a、第266図1:胴上部が張る器形と思われる。胴下部は反り気味に直立する。一部連鎖状の降線により懸垂文が描かれている。
- b、第266 図2: 胴部中位がくびれてそれ以上が外反する器形と思われる。多様沈線文様が みられる。
 - c、第266 図3: 胴上部が張る器形と思われる。胴上部に連続刺突文が施されている。
 - d、第266 図4~9: 頚部が「く」字状にくびれる器形と思われる。6 は文様単位が不明、他



第269図 基本層位出土土器 (GQ~GT・50~53区)

は多条沈線文様である。

e、第266図10~15:口縁部までわずかに脹みをもって立ち上がる器形と思われる。10・15は方形区画文が、他は蕨手文、ジグザグ文が施文されている。

第267図1~7は口縁部の器形を推定できない。6は半截竹管状の幅の狭い平行線による条線がみられる。

鉢(第267図8~11)

頚部が「く」字状を呈する器形と思われる。渦付三角文などが施文されている。

壺(第268図1~3)

小形の壼である。胴部上半に渦文などがみられる。

底部資料 (第268 図4~8)

器形を推定できない。4には木葉痕と網代痕が、5・6・8には木葉痕が、7には網代痕が認められる。

その他の土器 (第269図1~4)

前述した後期前葉の土器とは著しく特徴が異るものである。いずれも深鉢の胴部資料で3は 頚部が「く」字状を呈する。

後期中葉の土器(第269図5~11)

5~8 は深鉢と思われる。a:口縁部が直立するもの(5)と、b:外傾するもの(6・7)とがみられる。8 は胴部資料である。9~11 は口縁部が内弯気味に立ち上がる浅鉢で、10 の口縁部は波状を成す。

第3号石組下出土土器

中期の土器

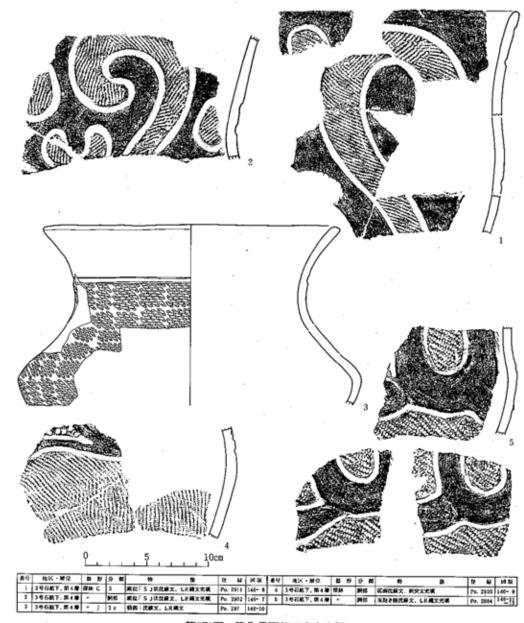
深鉢

口縁部資料 (第270図1~6・第271図1)

- a:口縁部が内弯し、キャリパー形のもの(第270図1~3)
- 1 は口縁部から胴部にかけて、縦位楕円文・縦位渦巻文、「」状文が幅の広い沈線で描かれ、それらの文様の内部に縄文が充塡されている。文様構成は胴上半部に大波状沈線が巡り、山・谷部には縦位楕円文・縦位渦巻文が配され、それらの文様が交互に繰り返される。胴下部は「」状の文様が並列している。2 は渦巻文が幅の広い沈線で描かれ、その内部に縄文が充塡されている。3 は地文だけが施文されている。
 - b:口縁部が外反し、胴部が緩やかに脹むもの(第270図4·5、第271図1)。



第270回 第3号石組下出土土器



第271図 第3号石組下出土土器

4は「」状文、5は渦巻文、1は「S」状の文様が幅の広い沈線で描かれ、それらの文様の内部に縄文が充塡されている。

c:口縁部が外反し、胴部が強く脹むもの(第270図6・第271図3)。

6は「」状の文様が幅の広い沈線で描かれ、内部に縄文が充塡されている。3は頚部に沈

線が巡り口縁部無文と胴部地文とを区画している。

胴部資料 (第271図2・4・5)

2 は「S」状・「」状の文様が幅の広い沈線で描かれ、内部に縄文が充塡されている。5 は玉抱き文が隆沈線で描かれ、文様の外側に縄文が充塡されている。4 の胴上部には沈線によって文様が描かれ、無文部分と刺突文とを区画している。

後期前葉の土器

第2・3・4層とに分かれるが一括して説明する。

口緣部資料 (第272 図、第273 図1~13)

いずれも深鉢である。

- a、第272 図1~3: 胴部中位がくびれてそれ以上が外反する器形である。多条沈線文様が施文されている。
- b、第272 図4~6: 頚部が「く」字状にくびれる器形である。口縁部が外反して端部に段がつく。4の胴部には多条沈線文様が認められ、5・6 は不明である。同図8 も同様の器形かも知れない。
 - c、第272図7:頚部が「く」字状にくびれて口縁部が短かく外傾する器形の小破片である。
- d、第 272 図 9・10:口縁部が内傾する器形である。頚部に稜がつき、胴部は直線的に外傾する。口縁部は無文、胴部に地文(縄文)がみられる。
- e、第 272 図 11~18、第 273 図 1~13: 口縁部・胴部がわずかに脹みをもって立ち上がる器形である。第 272 図 11~18、第 273 図 1~8 は胴部に文様がみられ、第 272 図 11 は襷状文、12・13・15 は蕨手文、17・18 は幅広い単位の文様、第 273 図 2~8 は多条沈線文様である。第 273 図 9~13 は口縁部、胴部が地文あるいは無文で、9 は刺突の加えられた隆線によって頚部が画されている。

胴部資料

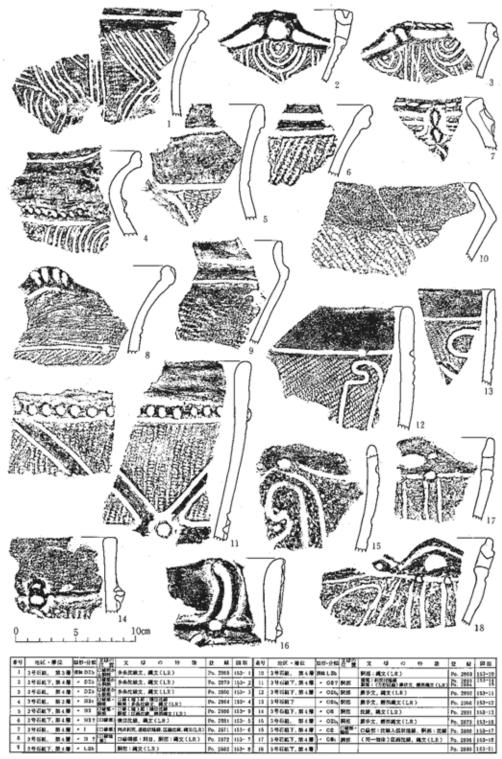
深鉢 (第273図14・15、第274図、第275図1・2)

第 273 図、第 274 図は頚部が「く」字状にくびれる器形と思われ、第 273 図 14 は横位展開文様が、第 274 図は多条沈線文様がみられる。第 275 図 1 も同様の器形かも知れない。第 273 図 15 は口頚部の器形が推定できない。第 275 図 2 は胴部から口縁部まで直線的に外傾する器形と思われ、胴部にジグザグ文がみられる。

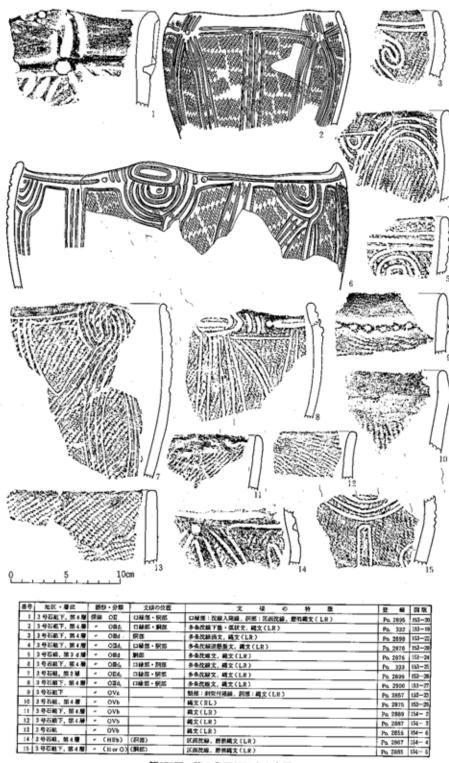
鉢(第275図3)

頚部が「く」字状を呈する器形と思われる。 渦文がみられる。

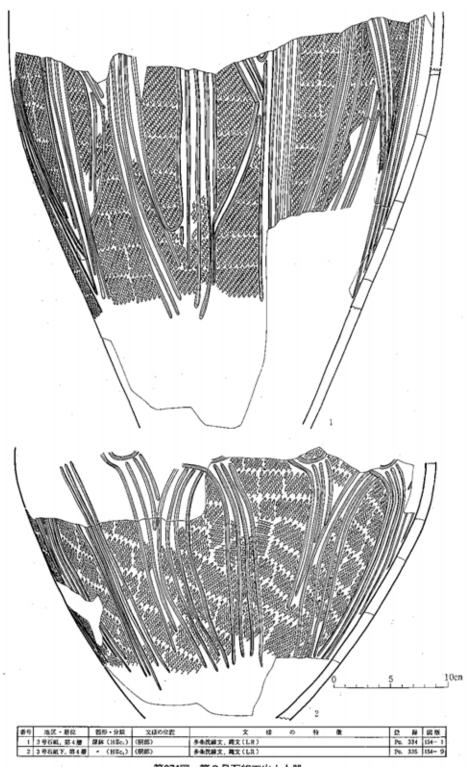
壺(第275図4・5)



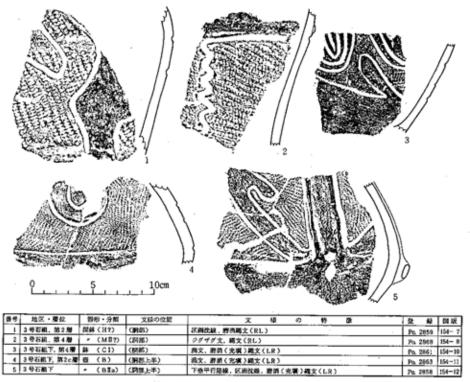
第272図 第3号石組下出土土器



第273図 第3号石組下出土土器



第274図 第3号石組下出土土器



第275図 第3号石組下出十十器

小形の壺と思われる。5は胴部中位に把手がつく。胴部上半に文様が施される。

GL~GT・45~49 区出土土器

中期の土器

口縁部資料(第276図、第277図1~6)

a:口縁部が内弯し、キャリパー形のもの(第276図1)

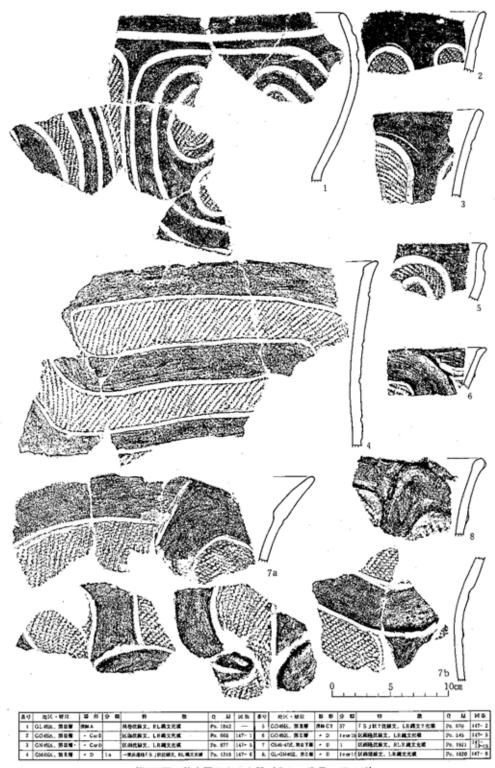
口縁から胴部に文様が描かれている。全体の文様は不明であるが、幅の広い沈線によって渦 巻状楕円文が描かれていると推定される。文様の内部には縄文が充塡されている。

b:口縁部が外反するもの(第276図2~7、第277図1~4)

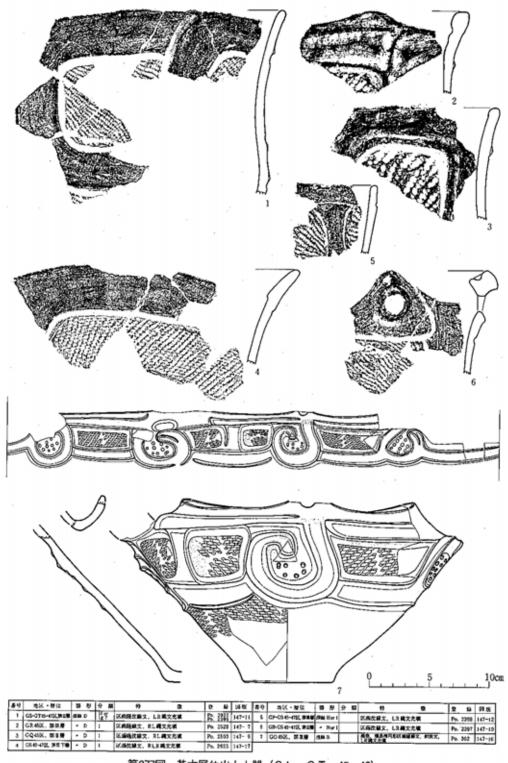
第276 図4 は「S」状の無文帯とその外側に充塡された縄文帯が沈線で区画されている。第277 図1 は「丁」状の無文帯とその外側に充塡された縄文帯が隆沈線で区画されている。第276 図2・3・5~6、第277 図2~4 は隆線・隆沈線・沈線によって区画文様が描かれている。

c:口縁部が直立するもの(第277図5・6)

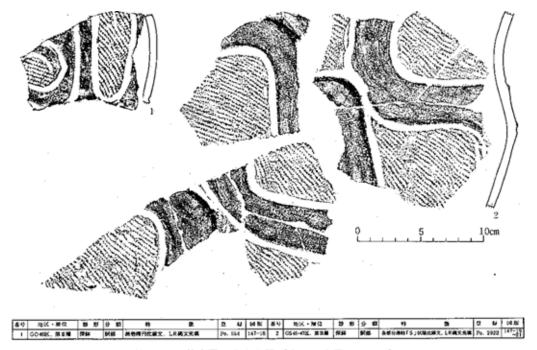
6は口縁部に小波状突起をもつ。突起部には内窓がある。5・6は幅の広い無文帯と充塡縄文帯が沈線で区画されている。



第276図 基本層位出土土器 (GL~GT·45~49)



第277図 基本層位出土土器 (GL~GT·45~49)



第278図 基本層位出土土器 (GL~GT·45~49)

胴部資料 (第278図1・2)

1・2 は文様が描かれている。1 は幅の広い沈線によって渦巻状楕円文が描かれ、その内部に縄文が充塡されている。2 は隆沈線によって各部分連結「S」状文が描かれ、その外側に縄文が充塡されている。

浅鉢

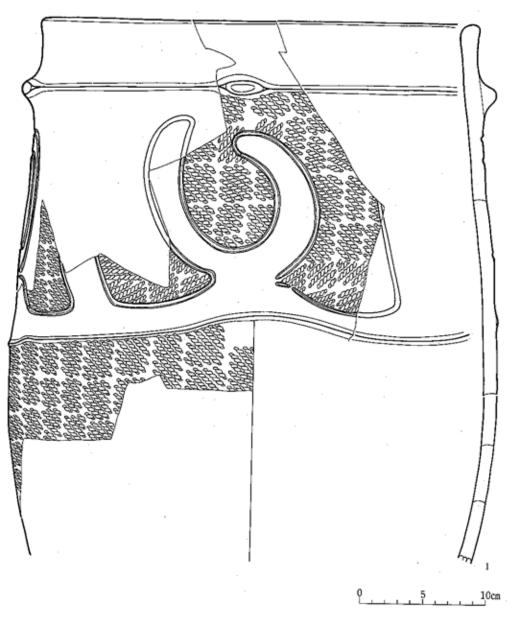
口縁部資料(第277図7)

口縁部は内傾し、波状突起をもつ。突起部には注口が1個付く。口縁部の文様は隆線による 区画文が描かれている。胴部の文様は隆線による渦巻状円文(無文帯)が描かれその末端は一 部鰭状の隆線となっているところもある。その渦巻状円文帯間には隆線による方形区画文が描 かれ、区画文外には縄文が充塡されている。また渦巻状円文の外側には刺突文が充塡されてい る。

後期前葉の土器

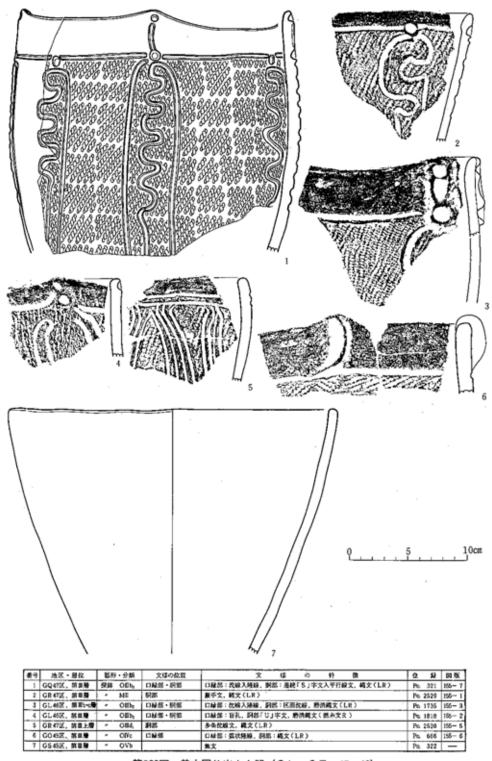
第層出土土器

口縁部資料 (第 279 図、第 280 図 1~7) いずれも深鉢である。

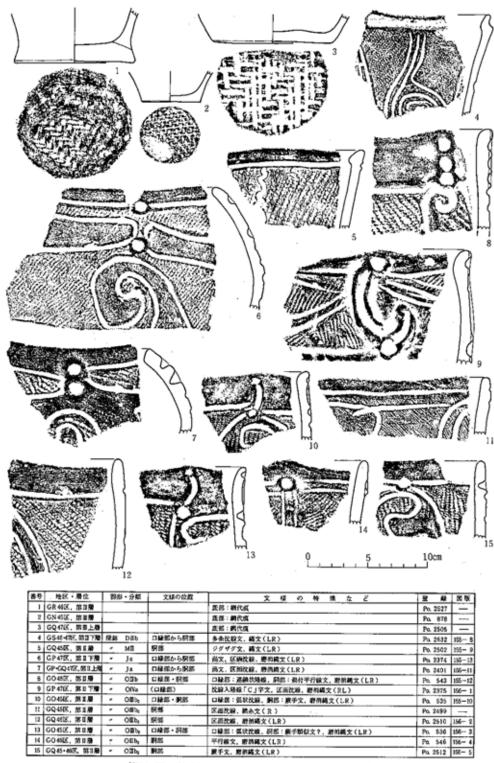


委号	地区・層位	競形・分類		文様の位置	文様の数数					D 45		回版	1	
1	GS471区、第12股	提針	ОШЬ	劉郎上半	「C」字文、獨文(充綱) 縄文(1	LR)				Po.	320	155 - 4	1

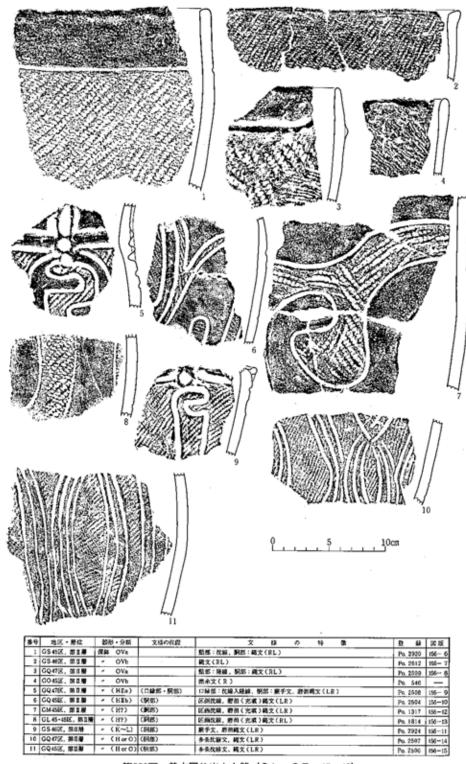
第279図 基本層位出土土器 (GL~GT・45~49)



第280図 基本層位出土土器 (GL~GT・45~49)



第281図 基本層位出土土器 (G L~G T·45~49)



第282図 基本層位出土土器 (GL~GT·45~49)

- a、第280図2:口縁部・胴部が直線的に外傾する器形である。口縁端部は削がれたように 三角を成す。口縁部は無文で胴部に蕨手文が施文されている。
- b、第279 図、第280 図1・3~7:口縁部、胴部がわずかに脹みをもって立ち上がる器形である。第279 図は胴上部から口縁部にかけて内傾気味となる。口縁部は無文、胴部上半に「C」字状の文様が施される。第280 図1・3・4 は低い山形突起がつき、突起下の口縁部に盲孔、沈線の入った隆線がみられ、胴部には蕨手文類似の文様、などが施文されている。第280 図5 は多条沈線文様である。同図とは口縁部に突起から弧状隆線が下る。7 は無文である。

底部資料 (第281図1~3)

1・2は深鉢、3は鉢形土器と思われる。底面に網代痕が認められる。

第層出土土器

口縁部資料(第281図4~15、第282図1~4)

いずれも深鉢である。第 281 図 6・7 は胴上部から口縁部にかけて内弯する。渦文が認められる。

第281 図 5 は口縁部・胴部が直線的に外傾し、口縁端部が削がれたように三角を呈する。口縁部は無文、胴部にジグザグ文がみられる。

第281 図8~15、第282 図1~4 は口縁部・胴部がわずかに脹みをもって立ち上がる。第281 図9 は口縁部に「C」字状の隆線と斜行沈線によって文様が描かれる。口縁部だけの破片のため胴部文様の有無は不明である。第281 図8、10・12~15 胴部に蕨手文、平行線文など縦位の細長い文様が施され、10・13 には口縁部突起下に弧状沈線がみられる。11 は幅広い単位の文様である。第282 図1~4 は口縁部、胴部が地文あるいは無文で、1・3 は隆線、沈線で頚部が画されている。

胴部資料 (第282 図5~11)

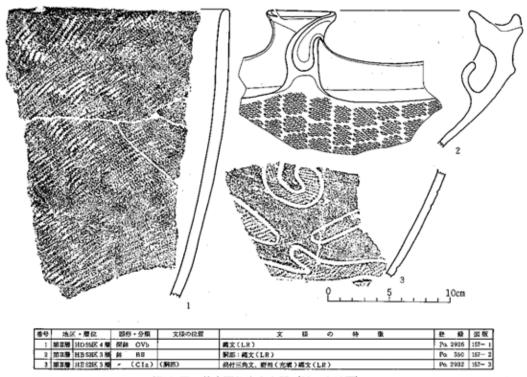
いずれも深鉢である。5・6 は頚部が「く」字状にくびれる器形と思われ、5 には縦位の蕨手文が、6 には横位に展開する文様がみられる。7・8 も同様の器形かも知れない。9 は胴部が直線的に外傾しており、口縁下部は内傾しそうである。蕨手文が施されている。10・11 は口縁部の器形を推定できない。多条沈線文様である。

H・I地区出土土器

後期前葉の土器

第 層出土土器 (第283 図)

1 は胴部から口縁部までわずかに脹みをもって立ち上がる深鉢である。縄文が施されている。 2 は鉢で、口縁部が内反し、頚部に稜がついて胴部は直線的に外傾する。高い突起が付き、頂



第283図 基本層位出土土器 (H・!地区)

部が凹み、縁は渦状の隆線となって橋状把手へ続く。口縁部は無文、胴部は縄文である。3 は 鉢の胴部破片である。文様は渦付三角文と思われる。

第層出土土器

《口縁部資料》

深鉢(第284図~第290図4)

- a、第284図1~6:胴部中位がくびれてそれ以上が外反する器形である。4は口縁端部が丸くおさまり、口縁部が無文で胴部に方形区画文が施文されている。1~3・5・6は口縁端部が内傾あるいは肥厚して段がつき、沈線状の凹みや沈線が走る。1・5には頂部の丸い突起がつき、1では窓が3個開いている。いずれにも多条沈線文様がみられ、1・3では下垂線によって文様帯を細長く区画し、その中に弧状線による三角文や、入組渦文を入れている。
- b、第284 図7、第285 図1: 頚部がゆるやかにくびれて口縁部が外反する。口縁部無文、 胴部地文である。
- c、第285 図2~7、第286 図1~5: 頚部が「く」字状にくびれて口縁部が外反する。口縁端部は直立あるいは肥厚して段がつく。胴部は、上部が内弯して以下は直線的に外傾する。第285図2の胴部には間に刺突の加えられた平行沈線がみられる。同図7は口縁部に頂部が丸く、幅

の広い突起がつき、蛇行する沈線文が施され、その下の口縁部には4条の隆線が下垂する。胴部に縦位の文様がみられる。また第264 図3・4 も縦位の文様である。第286 図1 は窓の開いた突起がつき、その下の口縁部に沈線の加えられた隆線が下垂する。胴部に横位に展開する渦文のついた三角文が施文されている。第285 図5、第286 図5 は口縁部に前者では橋状把手、後者には隆線が下垂し、胴部にいずれも多条沈線文様が認められる。第285 図3・4・6、第286 図2 は口縁部破片である。

- d、第286 図6、第287 図1・2:口縁部は内傾し、頚部に稜がついて胴部が直線的に外傾する。6 は口縁端部が肥厚し、胴部に文様がみられる。1・2 口縁端部が丸くおさまり、1 には低い突起がついて口縁部にボタン状隆線、胴部に蕨手文が施され、2 は口縁部に楕円文が施文され、胴部は縄文である。
 - e、第286 図7:口縁・胴上部が内弯する器形である。胴部に文様がみられる。
- f、第287図3・4:口縁部・胴部が直線的に外傾する。3には窓の開いた大小1対の突起がつく。口縁部は無文、胴部に縦位の「」字文、破線文がみられる。
- g、第287 図5~10、第288 図、第289 図、第290 図1~4:口縁部・胴部がわずかに脹みを もって立ち上がる器形である。低い突起の付くものが多い。

第287 図 5 は三角の突起がつき、その下に「八」字状の橋状把手がみられる。胴部に方形区画文が施文されている。第288 図 6~10、第289 図 1・4 は胴部に平行線の上部が肥厚した蕨手文、「」字文、楕円文などが描かれ、また突起下の口縁部に沈線の加えられた隆線文がみられるものもある。第289 図 3 は胴部に幅広い文様がみられ、同図 2・5 は胴部文様が不明である。第288 図 6 は断面三角形の隆線と沈線によって文様が描かれているが、単位が明らかでない。同図 7・8 は多条沈線文様がみられ、8 の口縁部上端には刻目が施されている。

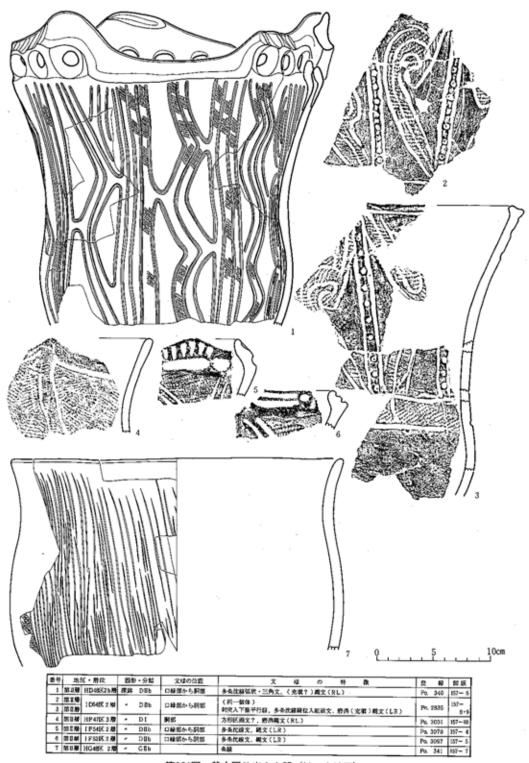
第288 図 9~11、第289 図 2~6、13 は頚部が隆線、沈線、列点刺突などで画され、口縁部無文、胴部地文である。第289 図 13 の地文は櫛歯状沈線で連続「S」字文風となっている。第289 図 1 は口縁部の一部に文様がみられる。

このほかの第 289 図 7~12、第 290 図 1~4 は地文あるいは無文のものであり、第 289 図 9 の内面には櫛歯状沈線が認められる。

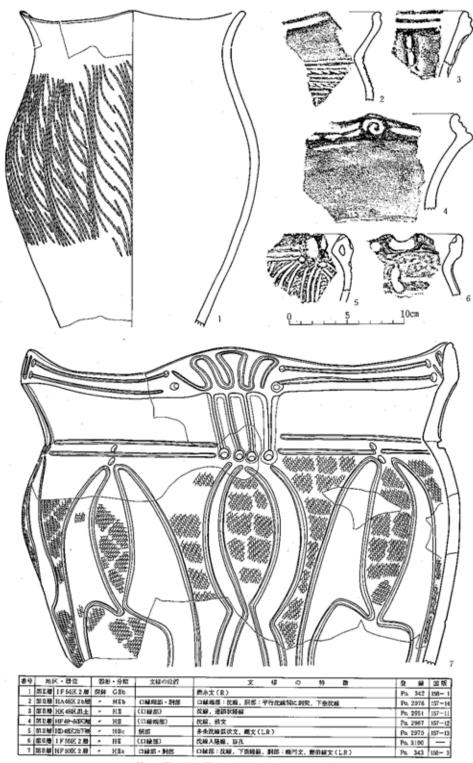
鉢(第290図5)

口縁部は内反気味に立ち上がる。胴上部は内弯し、以下は直線的に外傾する。高い突起がつき、突起の縁が渦状になって頚部に下る。口縁部は突起下を除き無文、胴上部に文様がみられる。横位の隆沈線と沈線、縦位の「S」字文で文様帯を画し、上位に刻目的な刺突、下位に縄文風にした連続刺突文が施文されている。

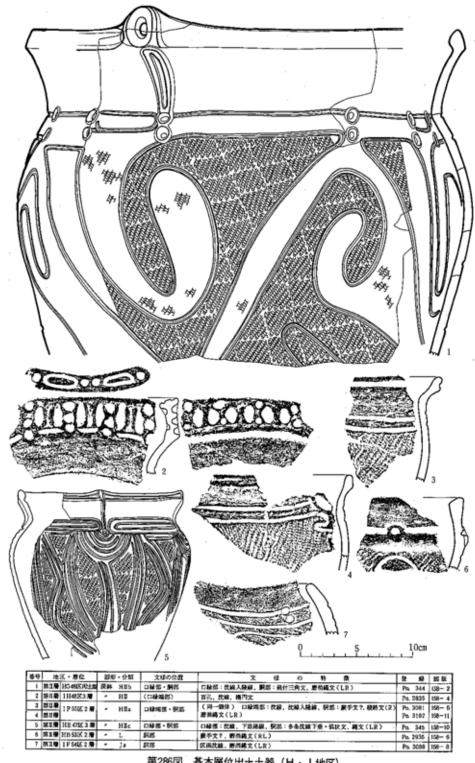
《胴部資料》



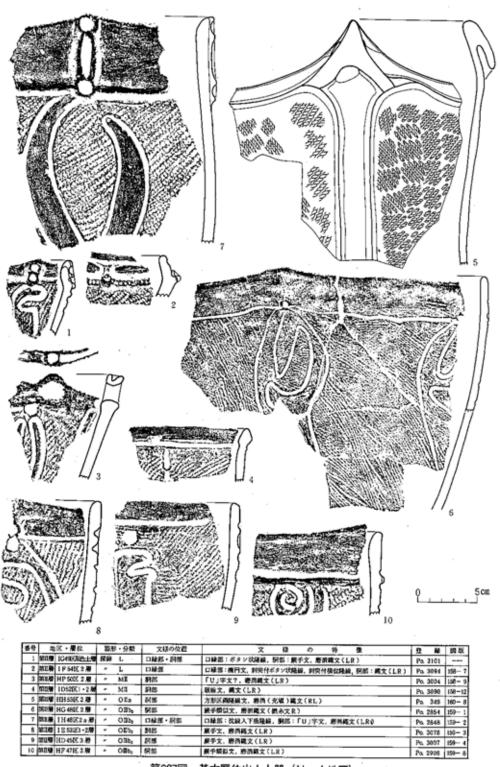
第284図 基本層位出土土器 (H·I地区)



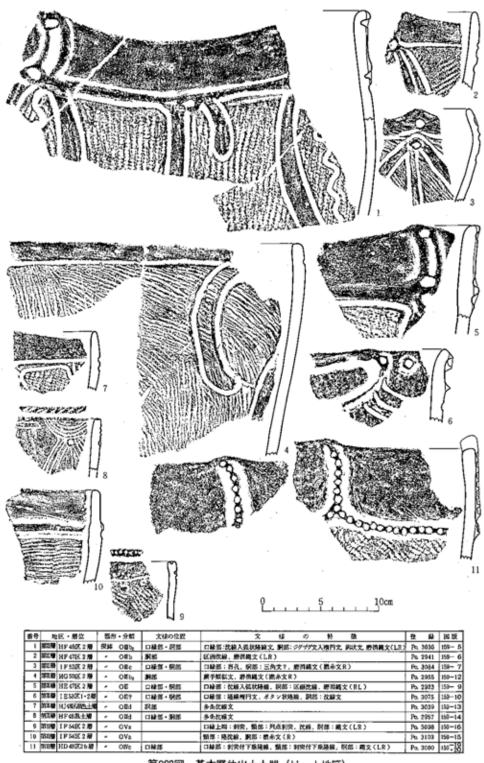
第285図 基本層位出土土器 (H·I地区)



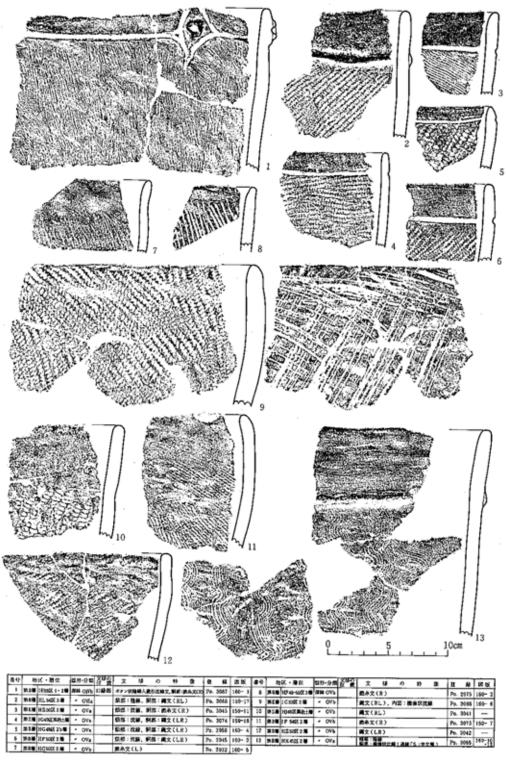
第286図 基本層位出土土器 (H·I地区)



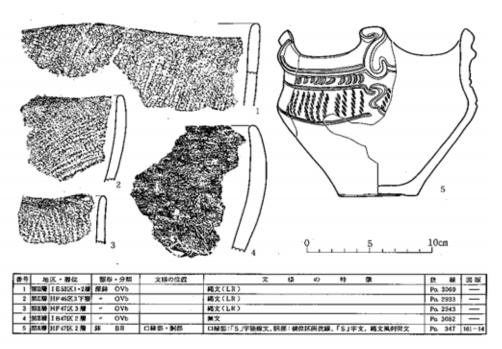
第287図 基本層位出土土器 (H·I地区)



第288回 基本層位出土土器 (H· I地区)



第289図 基本層位出土土器 (H・I地区)



第290図 基本層位出土土器 (H·I地区)

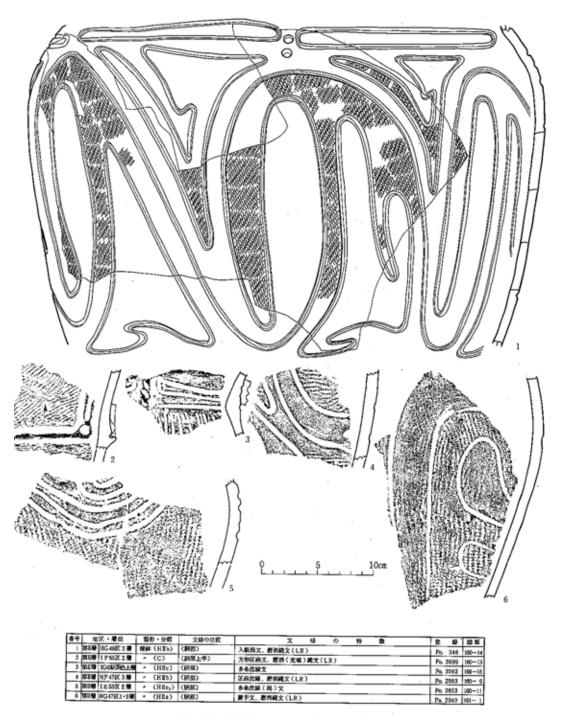
深鉢(第291図、第292図1~7)

- a、第291 図 1・3~6: 頚部が「く」字状にくびれる器形と思われる。1・4 は横位に展開する文様がみられ、1 は入組渦文である。6 は縦長単位の蕨手文、3・5 には多条沈線文様が認められる。
- b、第291 図2: 胴部中位に稜がつき、それ以上が外反気味に立ち上がる器形と思われる。 胴部上半に方形区画文が施文されている。
- c、第292図1・2:口縁部までわずかに脹みをもって立ち上がる器形と思われる。1は胴部上半に方形区画文が、2は縦長の単位の文様がみられる。
- 同図 3~7 は口縁部の器形を推定できない。3~6 には多条沈線文様が、7 には曲線的な櫛歯 状沈線がみられる。

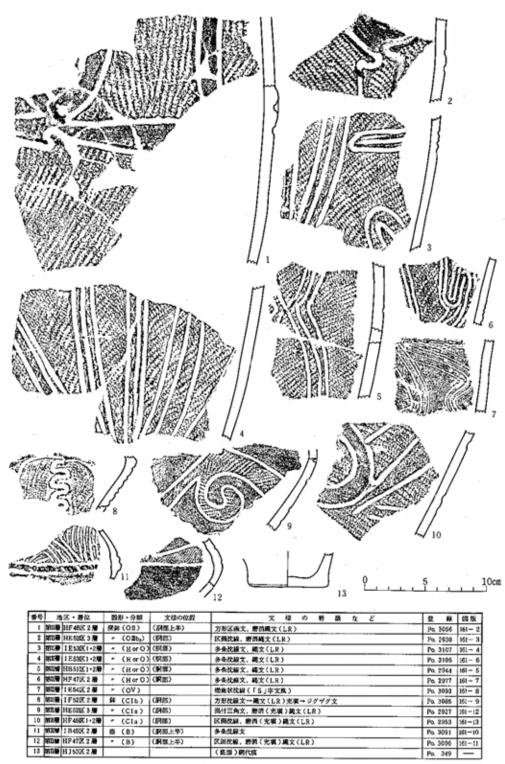
鉢(第292図8~10)

いずれも頚部が「く」字状を呈する器形と思われる。8 はジグザグ文の入った方形沈線文が、 9・10 には横位に展開する文様が施文されている。

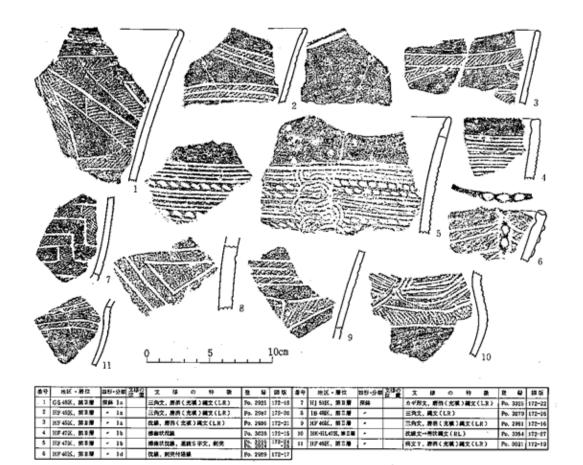
賣(第292図11・12)



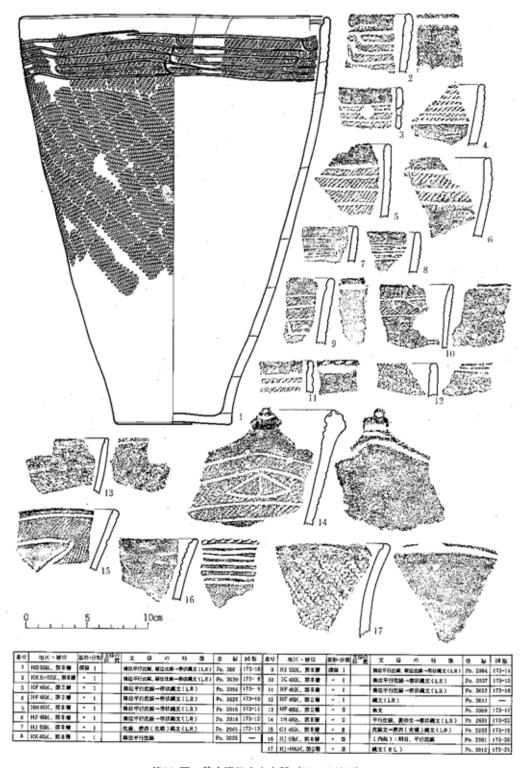
第291図 基本層位出土土器 (H·I地区)



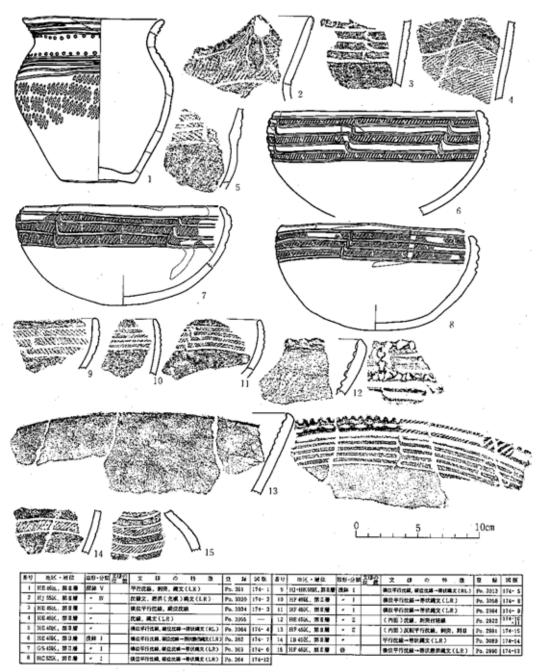
第292図 基本層位出土土器 (H·I地区)



第293図 基本層位出土土器 (H·I地区)



第294図 基本層位出土土器 (H·I地区)



第295図 基本層位出土土器 (H·I地区)

小形の壺である。胴部上半に文様がみられる。

《底部資料》(第292図13)

器形は不明である。底面に網代痕が認められる。

その他の土器 (第293図)

前述した後期前葉の土器とは著しく特徴が異るものである。いずれも深鉢であり、1~6の口縁部資料は口縁部から胴上部が外傾する器形である。2・3・5・6の口縁部は波状を成す。口縁部内面に一条の沈線が巡る。7~11の胴部資料のなかで10・11は、上部がくびれてそれ以下が脹みをもつものであり、上記の口縁部資料にはみられない器形である。

後期中葉の土器 (第294、295図)

第 294 図、第 295 図 1~5 は深鉢である。a:口縁部が直立するもの(第 294 図 1~12)、b:外傾するもの(第 294 図 13~15)、c:口縁部が外反するもの(第 294 図 16・17)、d:頚部がくびれて口縁部が外反するもの、e:胴上部がくびれてそれ以上が内弯気味に外傾するものの5 種が認められる。bの14 とeには突起がつく。またa・b・cの口縁部内面には一条の沈線が巡る。第 295 図 3~5 は胴部資料である。

第 295 図 6~14 は浅鉢である。 a:口縁部が内弯あるいは内弯気味に立ち上がるもの(6~11)と、b:外傾するもの(12・13)がみられる。bは内面に文様が施されている。14 は胴部資料である。

第295図15は壺と思われる。

13. 表十・地区層位不明の十器

南側遺物包含層地区

口縁部資料

深鉢(第296図~第301図5)

a:第296図1~4:胴部中位がくびれてそれ以上が外反する器形と思われる。2は大きな突起がついている。1・2・4には多条沈線文様がみられ、3は2条の平行沈線によって文様が描かれている。

b:第296 図5~7、第297 図:頚部が「く」字状にくびれる器形である。第296 図5 は口縁部が外傾して端部が角ばり、胴上部は内弯気味になる。低い山形突起がついてその下に「の」字状文がみられる。胴部には「の」字状文の入った略方形の区画文が施文されている。第296

図7は口縁端を欠く。胴部はゆるやかに立ち上がり、上部がわずかに内弯する。胴部に斜行流水文がみられる。第296図6、第297図は口縁部が外反、外傾して端部に段がつき第297図5は突起下に橋状把手がみられる。第296図6、第297図4・6~10は口縁部破片で、第297図1は胴部に縦位の文様が、同図2・3・5は多条沈線文様が施されている。

- c、第298 図1・2:口縁部が内反する器形である。頚部に稜がつき、胴部は直線的に外傾する。1 は突起がつくと思われるが形状は不明、2 は突起と一体になった橋状把手がつく。胴部に蕨手文が施文されている。
- d、第 298 図 3~6:口縁部・胴部が直線的に外傾する器形である。3・4 は口縁端部が削がれた様に三角を成し、口縁部は無文で胴部に文様がみられる。3 は蕨手文である。5・6 は口縁端部が肥厚して内面に段・外面に沈線が巡る。口縁部から胴部にかけて文様がみられるが、単位が不明である。
- e、第 298 図 7~10、第 299 図~第 301 図 5:口縁部・胴部がわずかに脹みをもって立ち上がる器形である。低い山形突起の付くものが多い。

第298 図 7~10、第299 図 1~5 の胴部文様は縦位の細長い単位で、平行線の上部が肥厚した 蕨手文などと、単に下垂するジグザグ文、連続「S」字文、平行線文などがみられ、第298 図 7・8、第299 図 1 では異った文様が交互に施文されている。なお第299 図 7 は上下連結の文様 かも知れない。第299 図 6 は幅広い単位の文様である。

第 300 図 1 4 は多条沈線文がみられる。1・4 は長い弧状線を組み合わせて文様を描き、4 の頚部には平行線の間に斜めの刻目を入れている。

第300 図 5 は口縁部突起下に刺突のついた隆線が下垂する。同図 8 は頚部に沈線が走り、突起下で刺突となる。第300 図 6・7、第301 図 1~5 は地文だけがみられる。

鉢(第301図6~11)

頚部が「く」字状を呈する器形である。口縁部が外反して端部は段を成す。7 は大小 1 対の 突起が、11 は突起と一体になった橋状把手がつく。胴部に楕円文の入った三角文、渦付三角文 がみられる。

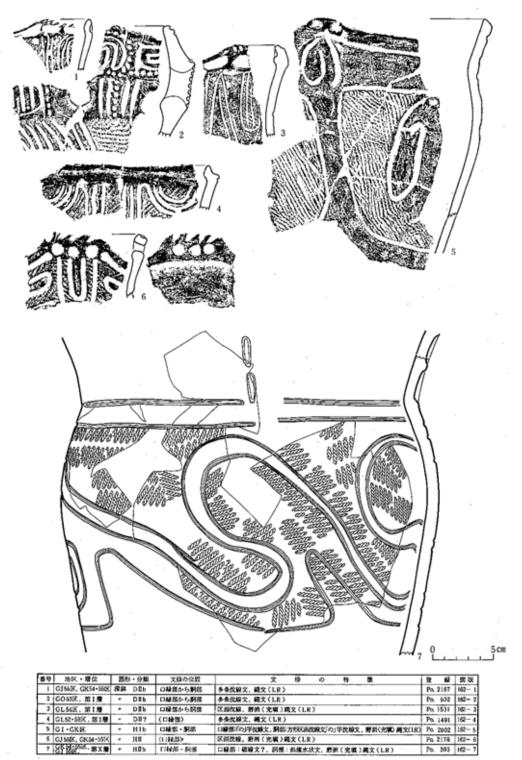
壺(第302図1)

いわゆる無類の壺と思われる。口縁部に渦文がみられる。

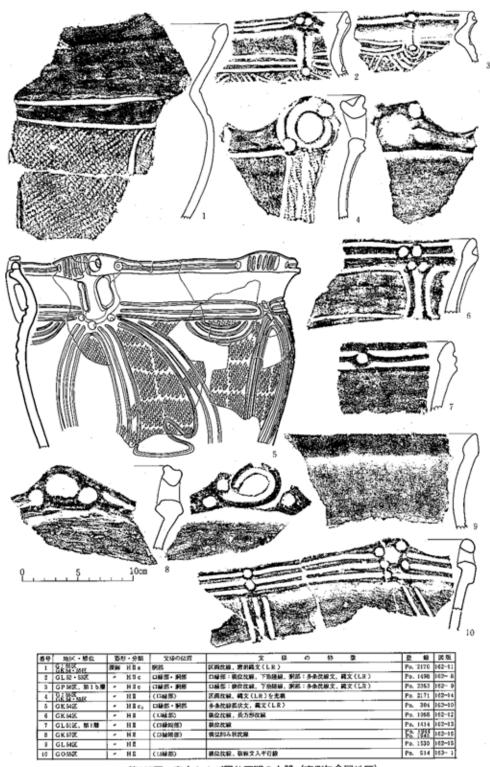
胴部資料

深鉢 (第302図2~第304図13)

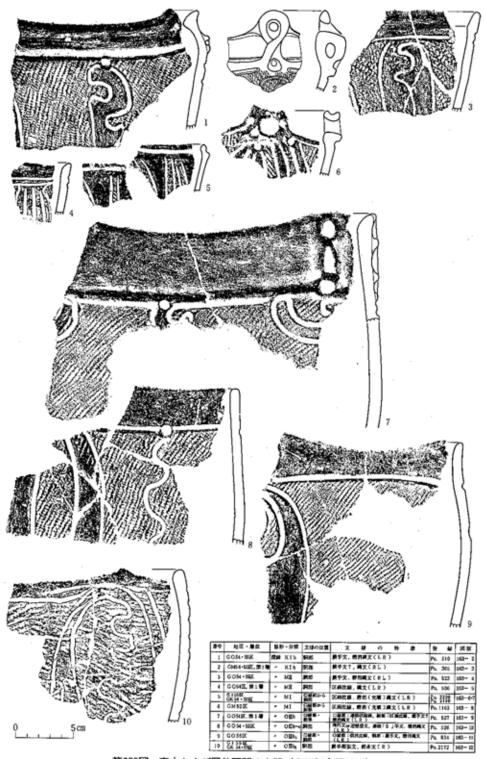
- a、第302図2・3:胴部中位がくびれてそれ以上が外反する器形と思われる。多条沈線文様がみられる。4・5も同様の器形かも知れない。
 - b、第302図6~13、第303図1~7: 頚部が「く」字状にくびれる器形と思われる。第302



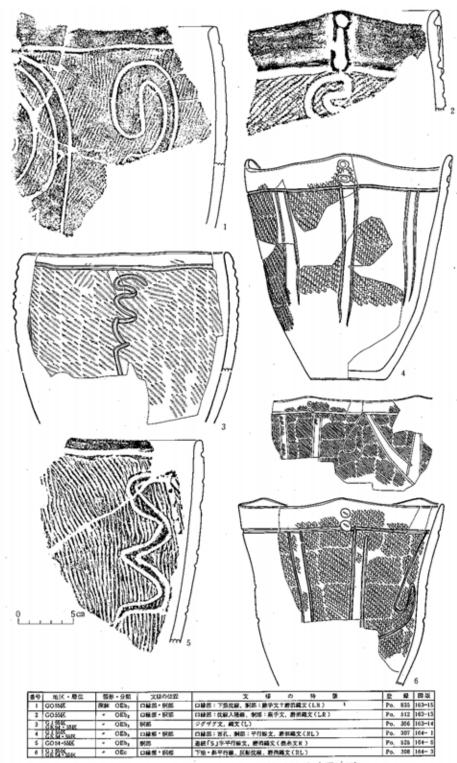
第296図 表土および層位不明の土器 (南側包含層地区)



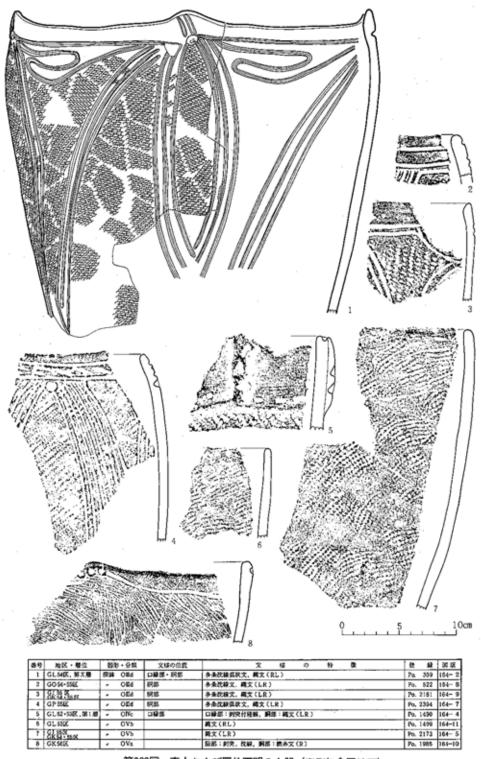
第297図 表土および層位不明の土器 (南側包含層地区)



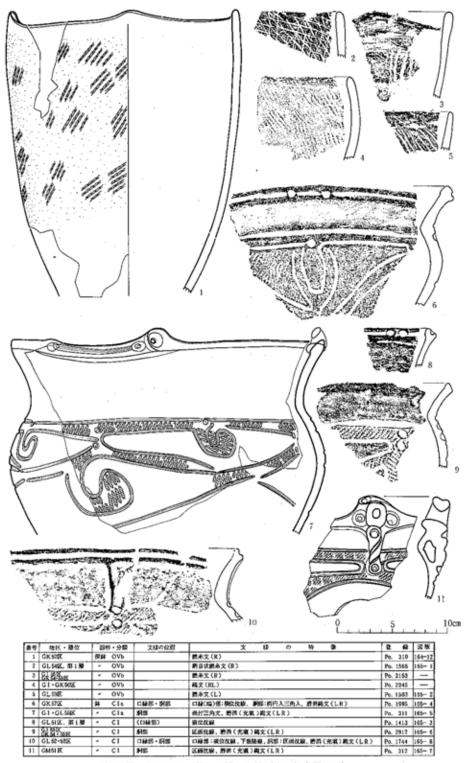
第298図 表土および層位不明の土器 (南側包含層地区)



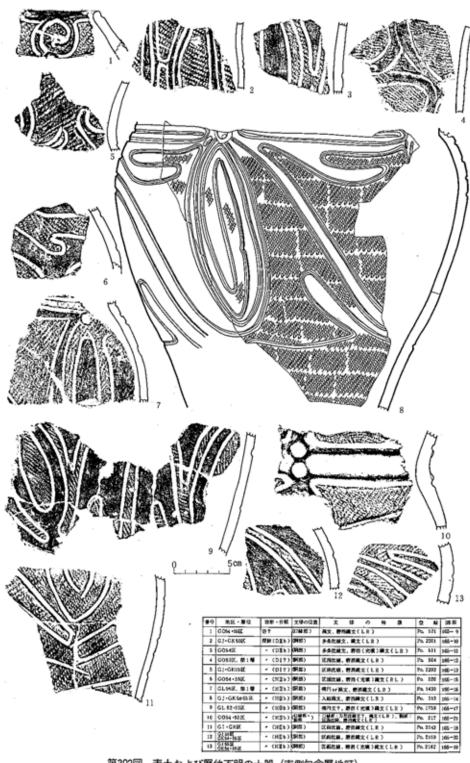
第299図 表土および層位不明の土器 (南側包含層地区)



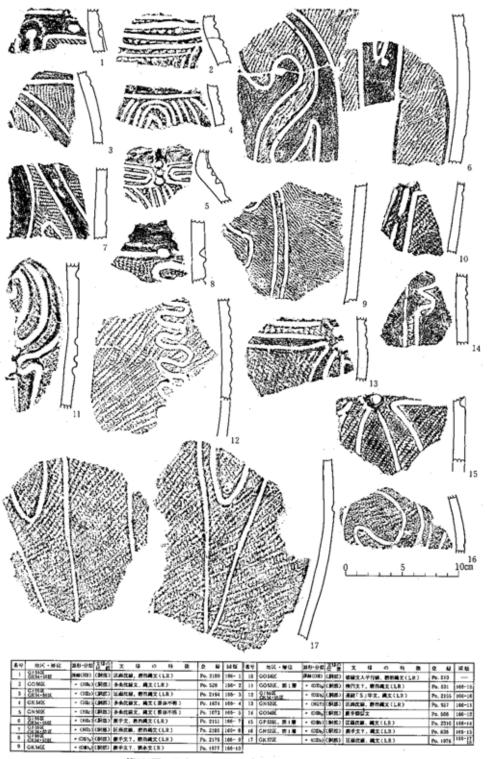
第300図 表土および層位不明の土器 (南側包含層地区)



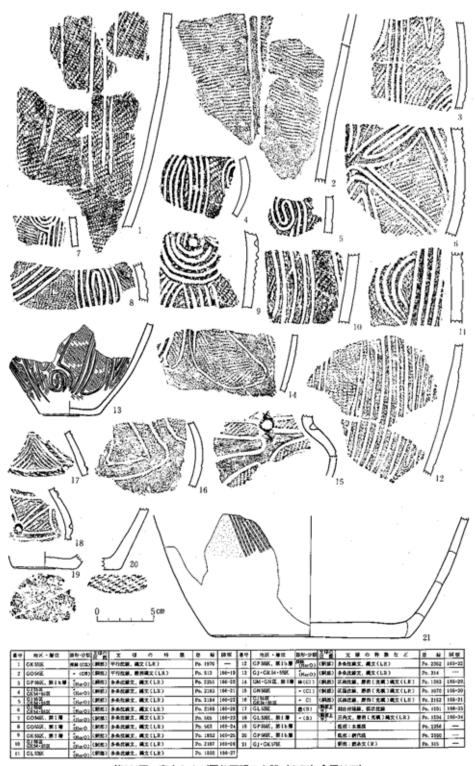
第301図 表土および層位不明の土器 (南側包含層地区)



第302図 表土および層位不明の土器 (南側包含層地区)



第303図 表土および層位不明の土器(南側包含層地区)



第304図 表土および層位不明の土器 (南側包含層地区)

図 6~13、第 303 図 3·7 は横位に展開する文様で、第 302 図 8 には入組渦文がみられる。第 303 図 6 は縦位の蕨手文、第 303 図 2·4·5 は多条沈線文様が施され、同図 1 は単位が不明である。

c、第303図8~17、第304図1・2:口縁部までわずかな脹みをもって立ち上がる器形と思われる。蕨手文、連続「S」字文などがみられる。

第304図3~13は器形を推定できない。多条沈線文様が認められる。

鉢(第304図14~16)

頚部が「く」字状を呈する器形と思われる。文様単位は不明である。

売(第304図17・18)

小形の壼である。17 は隆線による三角形の区画内に弧状沈線を入れている。18 は三角文である。

底部資料 (第304図18~21)

器形を推定できない。19の底面には木葉痕が、20には網代痕が認められる。

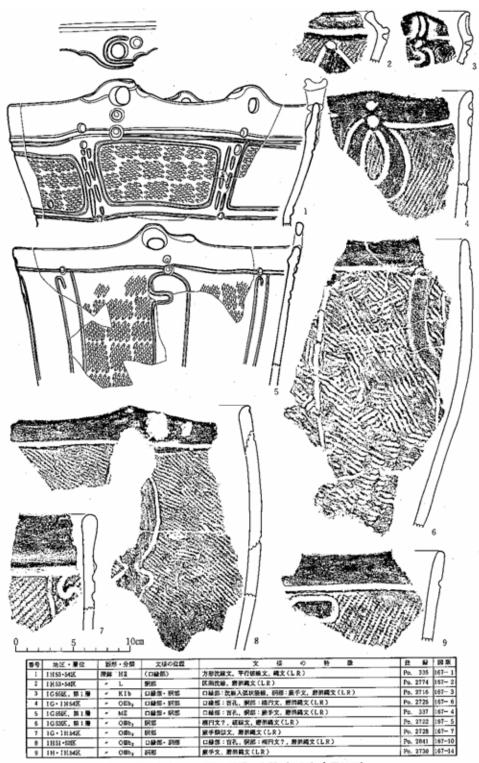
北側遺物包含層地区

後期前葉の土器

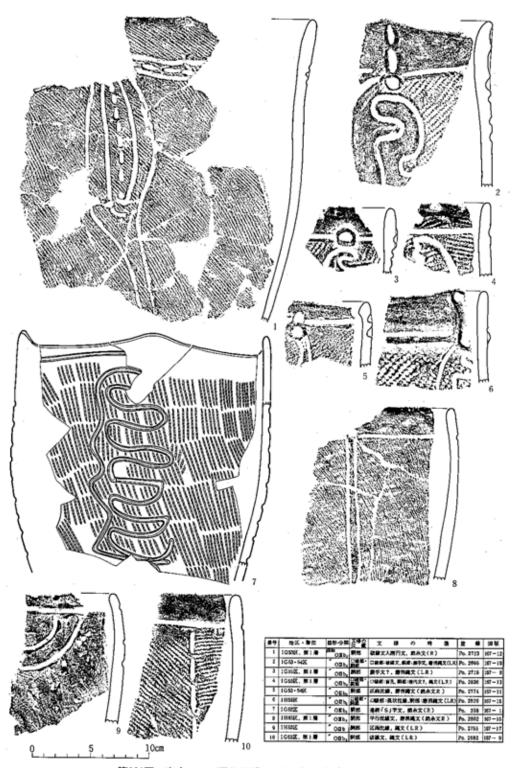
口縁部資料

深鉢(第305図~第307図6)

- a、305 図 1: 頚部が「く」字状にくびれる器形である。口縁部は弱く外傾して端部が丸く おさまる。窓の開いた大小 1 対の突起がつく。また同一個体の破片にも小突起がみられ、対面 に位置するものと思われる。口縁部には方形沈線文とその間に破線文が縄文を地文として描か れている。
- b、第305 図2:口縁部が内傾する器形である。端部は肥厚する。頚部に稜がつき、胴部は 直線的に外傾する。胴部に文様がみられる。
- c、第305図3:口縁部が内反する器形である。頚部に稜がついて胴部は直線的に外傾する。 低い山形突起がついてその下の口縁部に沈線の加えられた弧状隆線が施され、胴部には蕨手文がみられる。
- d、第305図5:口縁部・胴部が直線的に外傾する。口縁端部は削がれたように三角を成し、窓のついた丸い突起がつく。胴部に蕨手文、鉤状平行線文が施文されている。
- e、第305 図 4・6~9、第306 図、第307 図 1~6:口縁部・胴部がわずかに脹みをもって立ち上がる器形である。低い山形突起のつくものが多い。第305 図 4・6~9、第306 図、第307 図 1 は胴部に「」字文、蕨手文、連続「S」字文、平行線文、破線文などの縦位に細長い単



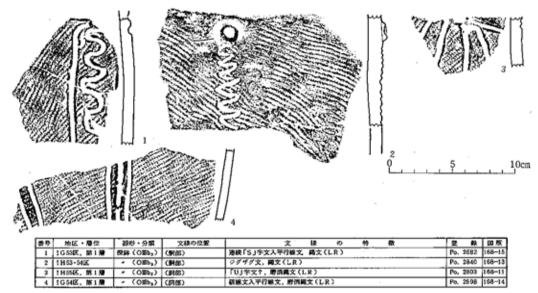
第305図 表土および層位不明の土器(北側包含層地区)



第306図 表土および層位不明の土器(北側包含層地区)



第307図 表土および層位不明の土器 (北側包含層地区)



第308図 表土および層位不明の土器(北側包含層地区)

位の文様がみられ、口縁部突起下にも文様のつくものがある。第307図2~6は口縁部・胴部が 地文あるいは無文である。2・3・6は沈線によって頚部が画されている。

鉢(第307図7・8・9)

7・8 は口縁部が内傾して端部は段を成す。頚部に稜がつく。8 は逆の「C」字文が施された橋状把手・突起がみられる。胴部は地文(縄文)である。9 は頚部が「く」字状を呈し、口縁部は外傾して端部に段がつき、小突起がみられる。口縁部は無文、洞部に渦付三角文が施文されている。

胴部資料(第307図10~14、第308図)

いずれも深鉢である。第308 図10・11・14 は頚部が「く」字状にくびれる器形と思われる。 10 は連結文様、11 は横位展開文様、14 は蕨手文がみられる。第307 図12・13、第308 図は口 縁部までわずかな脹みをもって立ち上がる器形と思われる。蕨手文、ジグザグ文、平行線文な どが施文されている。

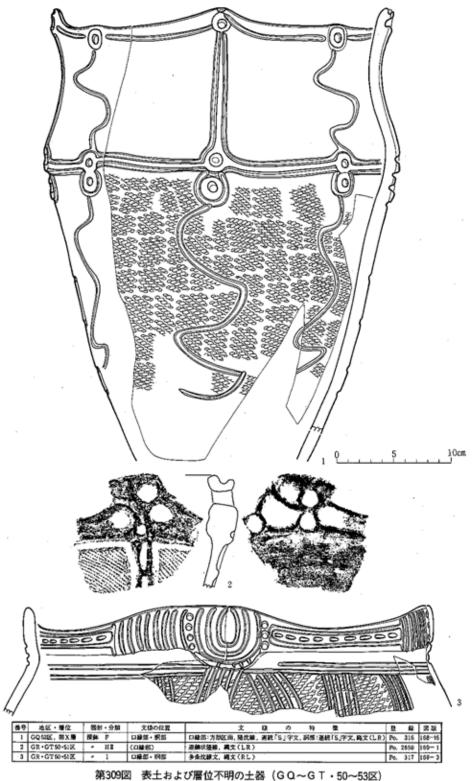
G O ~ G T · 50 ~ 53 区

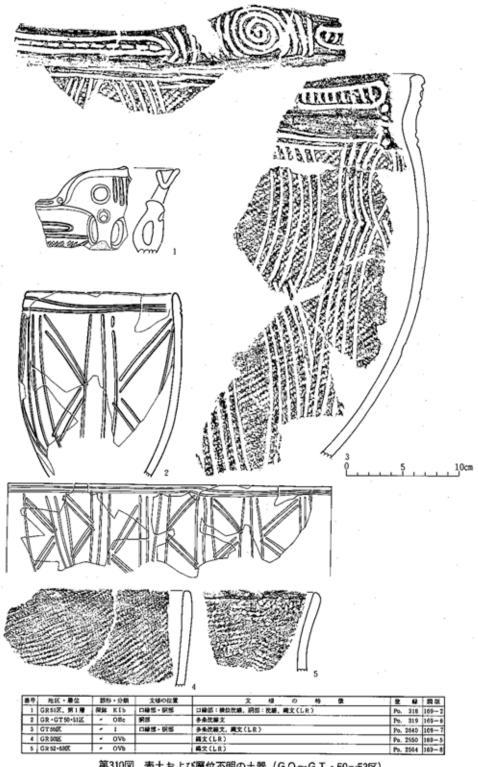
後期前葉の土器

口緣部資料 (第309図~第311図5)

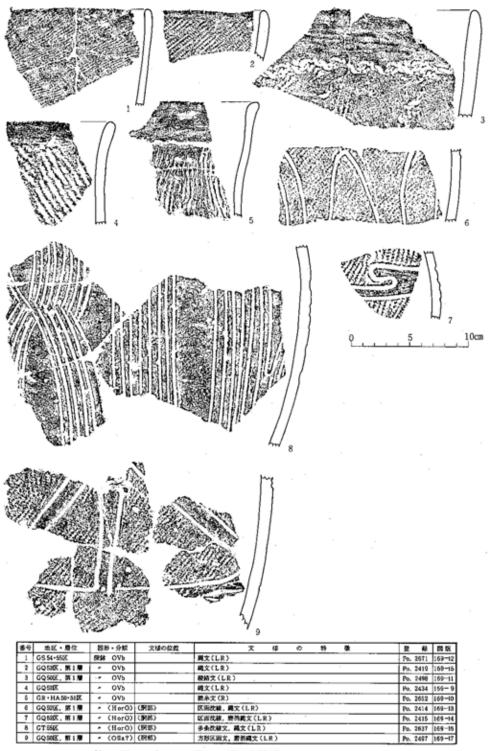
いずれも深鉢である。

a、第309図1:口縁部がゆるやかにくびれて外反する器形である。頚部に稜がつく。胴部はわずかに脹みをもつ。4個の低い山形突起がつき、突起から頚部に隆沈線が、突起の中間から連続「S」字文が下垂する。胴部には連続「S」字文が8単位施文される。





第310図 表土および層位不明の土器 (GQ~GT・50~53区)



第311図 表土および層位不明の土器 (GQ~GT・50~53区)

- c、第309 図3、第310 図3: 頚部が「く」字状にくびれ、口縁部が短く内弯気味に直立する器形である。第310 図3 は胴部が丸味をもつ。幅広く低い突起がつく。口縁部には突起とその下に円・渦文と弧状文が、さらにそれを結ぶような破線、刻目の入った平行線がみられ、胴部に多条沈線弧状文が施文されている。
 - d、第310図1:口縁部が「く」字状を呈する器形である。突起と橋状把手がつく。
- e、第310 図2・4・5、第311 図1~5:口縁部・胴部がわずかに脹みをもって立ち上がる器形である。第310 図2 は胴部に多条沈線文様か施され、他は口縁部、胴部が地文あるいは無文で、第311 図3 の頚部には綾絡文がみられる。

胴部資料(第311図6~9)

いずれも深鉢であるが、6~8 は口頚部の器形を推定できたい。9 は口縁部までわずかな脹みをもって立ち上がる単純な器形と思われ、方形区画文が施文されている。

その他の地区、地区層位不明

早期末葉の土器 (第313図1・2)

1・2 は同一個体と思われる。深鉢形土器の胴部破片で、繊維を含み、内外面ともに貝殻条痕が認められる。

中期の土器

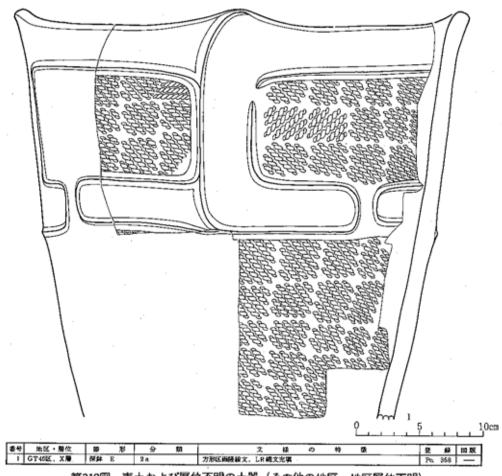
口緣部資料 (第312図)

口縁部は外傾し、胴部が僅かに脹らむ。口縁部は小波状になっている。文様は磨消手法によって描かれている。胴上部の文様は方形状の無文帯とその外側に充塡された縄文帯が隆線で区画されている。

後期前葉の土器

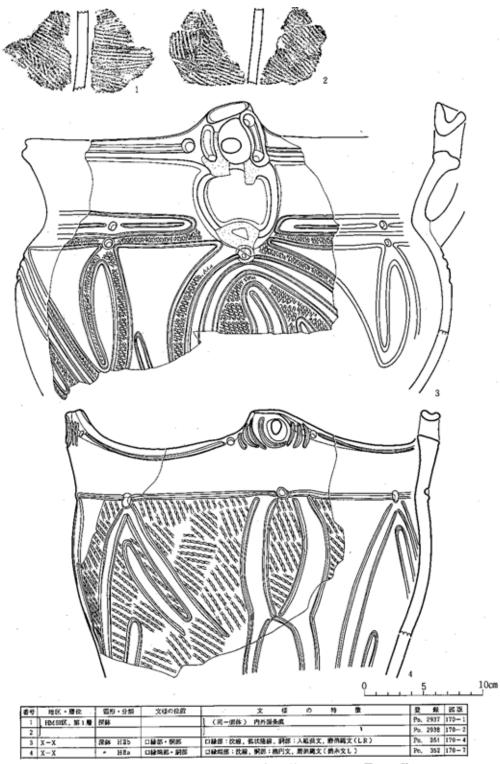
口緣部資料 (第 313 図 3·4、第 314 図、第 315 図、第 316 図 1~9)

第313 図3・4、第314 図、第315 図、第316 図1~5 は深鉢である。このうち第313 図3・4、 第314 図1 は頚部が「く」字状にくびれる器形である。3 は口縁部が外反し、胴中・上部は丸味をもって上部で内弯する。口縁に頂部が凹み、窓の開いた突起がつく。突起下には橋状把手の基部が残存し、上下の基部を結ぶように弧状の隆線が走る。また突起の窓沿いと、口縁端部には沈線がみられる。胴部には横位に展開する入組渦文が施文されている。4・1 は口縁部の外反・外傾、胴上部の内弯の度合がいずれも弱いために頚部のくびれがわずかなものになっている。1 は口縁端部に沈線、口縁部に連鎖状隆線・胴部に横位展開の文様がみられる。4 は口縁

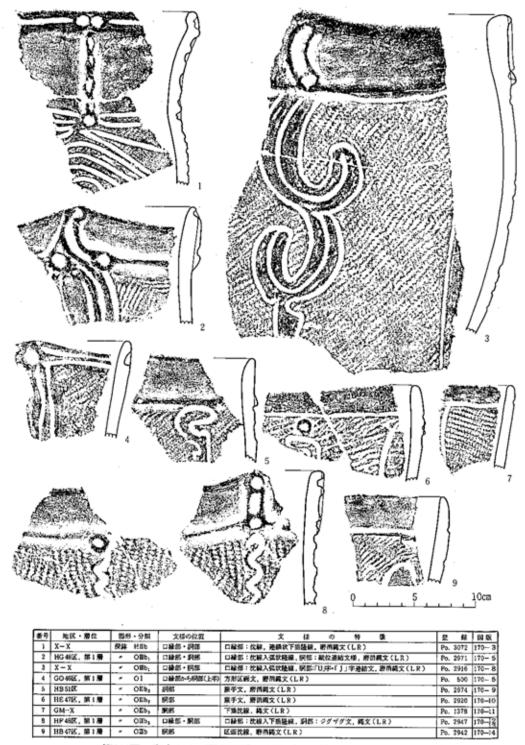


第312図 表土および層位不明の土器 (その他の地区・地区層位不明)

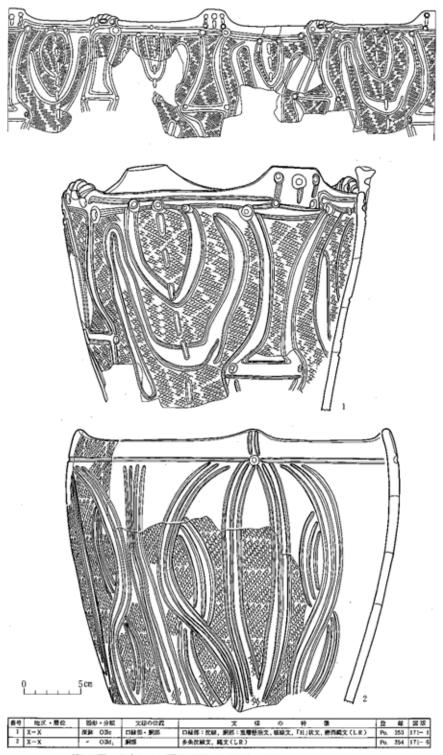
に突起がつき、頂部の凹みが一方に下る。また窓が開き、それに沿って弧状沈線がみられる。口縁部は端部に沈線が走るほかは無文で、胴部には連結する楕円文と三角文が施文されている。第314 図2~9、第315 図、第316 図1~5 は口縁部・胴部がわずかに脹みをもって立ち上がる器形である。低い山形突起をもつものが多い。第314 図4 は口縁部から胴部(上半)にかけて方形区画文がみられる。第314 図2·3 は胴部は幅狭い縦長の上下に連結する単位が認められ、口縁部突起下には沈線が加えられた弧状隆線が施される。第314 図5・6 は胴部に縦位平行線の上部が肥厚した蕨手文が、同図7・8 は単に下垂するジグザグ文などがみられ、9 は単位形が不明である。第315 図1 は台形と山形の突起が交互に4 個つき、装飾が施される。胴部には縦位の幅広い単位の重層する懸垂文とくびれた「H」字状の文様がくり返される。4 単位と思われる。第315 図2、第316 図1・2 には多条沈線文様が施文されている。第316 図3~5 は口縁部無文、胴部縄文で、3・5 の頚部は沈線で画されている。5 の底面に網代痕が認めら



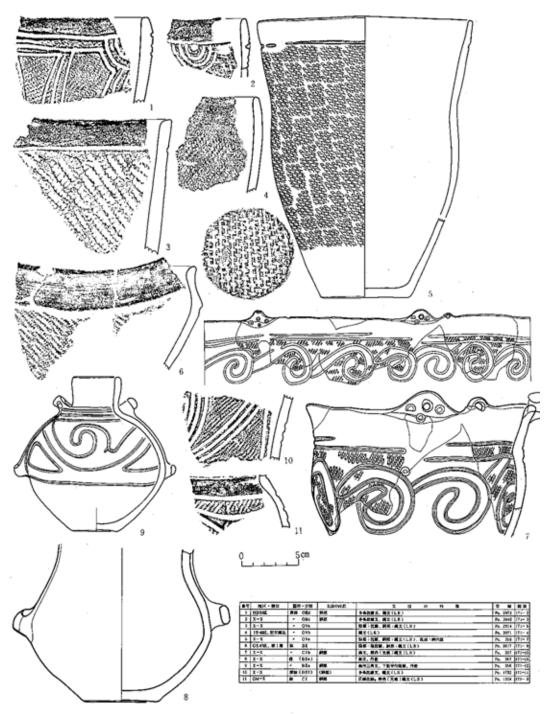
第313図 表土および層位不明の土器(その他の地区・地区層位不明)



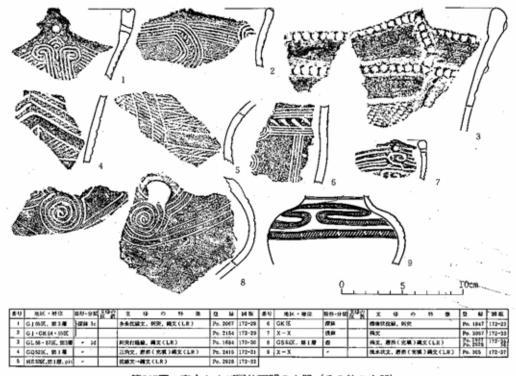
第314図 表土および層位不明の土器 (その他の地区・地区層位不明)



第315図 表土および層位不明の土器 (その他の地区・地区層位不明)



第316図 表土および層位不明の土器(その他の地区・地区層位不明)



第317図 表土および層位不明の土器 (その他の土器)

れる。

第316 図6・7 は鉢である。6 は口縁部が内反して頚部に稜がつき、胴部は直線的に外傾する。 口縁部無文・胴部は縄文である。7 は頚部が「く」字状を呈し、口縁部が外反して胴上部が内 弯する。窓の開いた大小1対の突起がつき、口縁部無文、胴部は渦文が7単位施文されている。

第316 図 9 は小形の壺である。口縁部が直立し、胴部はほぼ球状を呈する。頚部と胴部中位に把手が 2 個づつ付いて、縦位の平行隆線で結ばれている。口縁部と胴部下半は無文、胴部上半に渦文のついた三角文が施文されている。 2 単位である。

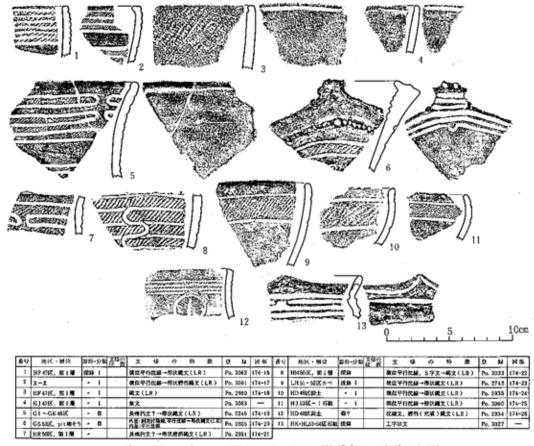
胴部資料 (第316図10・11)

10 は深鉢であり、胴部中位がくびれる器形と思われる。多条沈線文様がみられる。11 は浅 鉢であり、頚部が「く」字状を呈する器形と思われる。

8 は壺である。9 と同様の把手がつき、胴上部が反り気味に内傾して立ち上がる。無文で丹塗りが認められる。

その他の土器 (第317図)

前述した縄文時代後期前葉の土器とは著しく特徴が異なるものである。1~6 は深鉢で、1~3 は口縁部が外傾し、突起がつく。4~6 は胴部資料である。7 は浅鉢と思われる。口縁部



第318図 表土および層位不明の土器 (後期中葉・晩期の土器)

が内弯気味に立ち上がり、低い突起がつく。8・9 は壺形土器と思われる。8 の上位に突起あるいは把手のはがれた跡がある。

後期中葉の土器 (第318図1~12)

- 1~8 は深鉢である。 a:口縁部が直立するもの(1~4)、b:外反するものとに分かれる。 6には突起がつき、内面にも沈線の施されるものが多い。7・8 は胴部資料である。
 - 9~11 は浅鉢である。口縁部は内弯気味に立ち上がる。
 - 12 は壺の口縁部と思われる。

晩期の土器 (第318図13)

浅鉢である。頚部がくびれて口縁部が外傾し、山形突起がつく。肩部に工字状文が施文され 内面にも沈線が巡る。